古志町地内集合住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

古志本郷遺跡

（第 14 次発掘調査）

2023

出雲市教育委員会

古志町地内集合住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

古志本郷遺跡

（第 14 次発掘調査）

2023

出雲市教育委員会

調査地全形（東北東から）

調査地全形（北から）

区画溝 SD1（東北東から）

区画溝 SD2（東北東から）

巻頭図版４

Ⅰ区完掘状況（東北東から）

10･11･a～c：ＳＤ１，30･31･c：ＳＤ２，53：ＳＫ９，e：ＳＫ 42，f：ＳＫ 14，77･78･g･h：遺構外　※アルファベットは非掲載遺物

青磁・白磁

序

本書は，民間企業から依頼を受けて実施した，集合住宅新築工事に伴う古志本郷遺跡第 14 次発掘調査の記録を収録した報告書です。

古志本郷遺跡は出雲市古志町に所在する弥生時代から続く集落遺跡で，隣接する下古志遺跡・田畑遺跡・古志遺跡・思案橋北遺跡とともに市内有数の大規模な集落遺跡群「古志遺跡群」を構成する重要な遺跡です。古志遺跡群の中でも大きな面積を占める古志本郷遺跡の実態を明らかにすることは出雲の集落遺跡研究においても重要です。

今回の調査では，15 世紀を中心とした時期の有力者の屋敷跡などが発見されており，出雲古志氏との関連も注目される貴重な成果となりました。今回の調査成果が出雲地域の歴史を解明していく上での貴重な資料の一つとして活用されることが期待されます。

本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査と報告書作成にあたりご協力いただきました関係者の皆様に厚くお礼申しあげます。

2023（令和５）年３月

出雲市教育委員会

教育長　杉谷　学

例　言

1．本書は，2021（令和3）年度に出雲市教育委員会が実施した集合住宅新築工事に伴う古志本郷遺跡第14次発掘調査の成果をまとめた報告書である。

2．調査は下記の体制，期間で実施した。

＜2021（令和3）年度＞　現地調査・報告書作成

調査地及び調査面積　島根県出雲市古志町983ほか　約600㎡

調査期間　2021（令和3）年10月8日～12月24日（現地調査）

調査体制　事務局　片寄　友子（出雲市市民文化部　次長兼文化財課課長）
大梶智徳（同　文化財課主査）
原　俊二（同　文化財課課長補佐兼埋蔵文化財2係長）
調査員　須賀照隆（同　文化財課埋蔵文化財1係長）
調査補助員　加藤章三（同　会計年度任用職員）
発掘作業員　伊藤伸　伊藤貴敏　漆谷繁富　江角和樹　勝部智子　阪口晴菜
高橋智大　田邊弘行　寄廣和人　渡部和憲（同　会計年度任用職員）
整理作業員　妹尾順子（同　会計年度任用職員）

＜2022（令和4）年度＞　報告書作成
事務局　片寄友子（出雲市市民文化部　次長兼文化財課課長）
吾郷尚志（同　文化財課課長補佐）
調査員　須賀照隆（同　文化財課埋蔵文化財1係長）
調査補助員　加藤章三（同　文化財課会計年度任用職員）
整理作業員　妹尾順子（同　文化財課会計年度任用職員）

3．本書の執筆と編集は，職員の協力を得て須賀が行った。

4．本書に掲載した出土品の実測は，須賀・加藤が行った。

5．図面・遺物の整理作業は須賀・加藤・妹尾が行った。

6．本書に掲載した写真は，須賀が撮影した。

7．本書に掲載した遺物及び実測図，写真は出雲市文化財課が保管している。

8．本書で使用した方位は，座標北を示す。座標は，世界測地系第Ⅲ系に基づくものである。標高は海抜高を示す。

9．本書で使用した遺構略号，横穴墓の遺構内名称，形態名称は以下のとおりである。

SD－溝　SK－土坑　SP－柱穴　SA－柵列

10．本書を作成するにあたり，参考とした文献は各章末に記載した。

11．本各遺物の編年については，次頁の文献を参考にした。

編年参考文献

弥生土器　正岡睦夫・松本岩雄編 1992『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社

須恵器　大谷晃二 2001「出雲地域の須恵器編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集 島根考古学会

土製支脚　岩橋孝典 2003「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について」『古代文化研究』第 11 号 島根県古代文化センター

陶磁器　石井啓・重根弘和 2013『備前窯詳細分布調査報告書』備前市埋蔵文化財報告 11 備前市教育委員会

上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究』２

太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－』

中世土器研究会編　1998『中世の土器・陶磁器』真陽社

日本貿易陶磁研究会 2002『中世後期における貿易陶磁器の様相』日本貿易陶磁研究集会中国大会資料集

乗岡実 2008「備前焼の編年について」『第７回中世土器検討会』山陰中世土器検討会

八峠興 2013「山陰地域から出土した中世後期の「威信財」について−瓦質土器を中心に−」『山陰中世土器研究１−西尾克己さん還暦記念論集−』山陰中世土器研究会

中世土師器　高橋周 2013「出雲平野における中世土師器の様相」『山陰中世土器研究１−西尾克己さん還暦記念論集−』山陰中世土器研究会

平石充・三代貴史 1999『古志本郷遺跡Ⅰ』斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書６ 島根県教育委員会

本文目次

第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 2

第１節　地理的環境 …… 2

第２節　歴史的環境 …… 2

第３章　古志遺跡群と既往の調査 …… 5

第１節　古志遺跡群と調査地点の位置 …… 5

第２節　これまでの調査 …… 5

第４章　調査の成果 …… 10

第１節　調査の概要 …… 10

第２節　遺構 …… 14

第３節　遺物 …… 23

第５章　総括 …… 29

第１節　遺跡の変遷 …… 29

第２節　中世屋敷跡について …… 31

第３節　古志氏と古志遺跡群 …… 34

挿図目次

第 1 図　事業地と確認調査等位置図 ……1
第 2 図　出雲平野の主要遺跡 ……3
第 3 図　古志遺跡群と調査地位置図 ……6-7
第 4 図　調査区土層堆積状況実測図 ……11
第 5 図　遺構配置図 ……12-13
第 6 図　SD1･SD1'･SD6･SD12 土層堆積状況実測図 ……15
第 7 図　SD2･SD2'･SD3 土層堆積状況実測図 ……16
第 8 図　SD4･6 遺構実測図 ……17
第 9 図　i15･16 グリッド周辺遺構群実測図 ……18
第 10 図 j14･k14 グリッド周辺遺構群実測図 ……19
第 11 図 SK7 遺構実測図 ……20
第 12 図 SK8･9 遺構実測図 ……21
第 13 図 SA1 遺構実測図 ……22
第 14 図 SD1 出土遺物実測図 ……23
第 15 図 SD2 出土遺物実測図 ……24
第 16 図 その他遺構内出土遺物実測図 ……25
第 17 図 遺構外出土遺物実測図 ……27
第 18 図 第 14 次調査Ⅰ区遺構変遷図 ……30
第 19 図 中世屋敷跡の推定範囲と隣接地調査状況 ……31
第 20 図 築山遺跡の中世屋敷密集状況 ……32
第 21 図 調査地周辺図 ……33

挿表目次

第 1 表　古志遺跡群の主な調査歴一覧 ……8
第 2 表　出土土器観察表 ……35-36
第 3 表　出土金属器観察表 ……36

写真図版目次

巻頭図版 1　調査地全景
巻頭図版 2　区画溝 SD1
巻頭図版 3　区画溝 SD2
巻頭図版 4　Ⅰ区完掘状況
　　青磁・白磁

図版 1　完掘状況空撮合成写真
図版 2　Ⅰ区 遺構検出状況
　　SD1･2
図版 3　SD1
　　SD1 調査区東壁土層堆積状況
図版 4　SD2
　　SD2 F － F′断面土層堆積状況
図版 5　SD2 屈曲部
　　SD2 屈曲部・SD2′
図版 6　SD4・SA1
　　SD6
図版 7　SD10
　　Ⅰ区 i15・16 グリッド周辺遺構群
図版 8　SK42
　　SK48
図版 9　SK7
　　SK8
図版 10　SK9
　　SK9 土層堆積状況
図版 11　Ⅱ区 遺構検出状況
　　Ⅱ区完掘状況
図版 12　SD1 出土土器
　　SD2 出土土器
図版 13　SK7 出土土器・SK7 付近遺構外出土土器
　　その他遺構内出土土器等
図版 14　その他遺構外出土土器
　　出土金属製品

第１章　調査に至る経緯と経過

2020（令和２）年，出雲市古志町地内の集合住宅新築工事予定地（第１～３図）について，事業主体である石飛産業株式会社から埋蔵文化財に係る協議を受けた。予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である古志本郷遺跡の範囲内であることから，事前に範囲内容確認を行うこととし，同年 12 月 17 日・翌年１月 19 日・５月 17 日に将来計画地を含めた範囲を対象に出雲市文化財課において重機による確認調査を実施した。調査の結果，今回の事業予定地の大部分で遺構・遺物が残存していることを確認したため，施工責任者である出雲土建株式会社を通じて事業者と出雲市文化財課で協議を重ね，2021（令和３）年 10 月から本発掘調査を実施することとなった（第１図）。

第１図　事業地と確認調査等位置図

発掘調査は，事業面積約 2,800㎡の内，遺跡への影響の大きい本体建築部分約 550㎡と浄化槽部分約 50㎡，計約 600㎡を対象とし，2021（令和３）年 10 月８日～同年 12 月 24 日の期間で実施した。調査後に島根県教育委員会との協議を行った結果，遺跡を記録保存に留めることはやむを得ないとの判断に至った。

＜発掘調査に関連する主な文化財保護法上の文書等＞

2021（令和３）年

７月 20 日　「埋蔵文化財発掘の届出について」事業者から市教委経由で県教委へ

８月 10 日　「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」県教委から市教委経由で事業者へ

９月 28 日　「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委から県教委へ

12 月 27 日　「埋蔵物発見届」市教委より出雲警察署へ

12 月 27 日　「埋蔵文化財保管証」市教委より県教委へ

12 月 27 日　「古志マンション建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委より県教委へ

2022（令和４）年

１月　５日　「遺跡の取り扱いについて（回答）」県教委より市教委へ

１月　７日　「埋蔵物の文化財認定及び帰属について」県教委より市教委へ

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

古志本郷遺跡は出雲市古志町地内に所在する集落遺跡である。出雲平野南西部，神戸川左岸の沖積地上に位置する。出雲平野は南北を中国山地と島根半島に，東西を宍道湖と日本海沿岸部の砂丘に挟まれた，東西約 20㎞，南北約５㎞にわたる県内最大の沖積平野である。平野を形成した二大河川，斐伊川と神戸川がそれぞれ中国山地から宍道湖と日本海に注いでいる。かつての出雲平野西部には，当時の斐伊川や神戸川が注ぐ大きな潟湖（『出雲国風土記』の神門水海）があり，現在とは大きく異なる景観が広がっていた。このような景観は弥生時代には既に形成視されていたと考えられる(第２図)。

第２節　歴史的環境

１　縄文時代

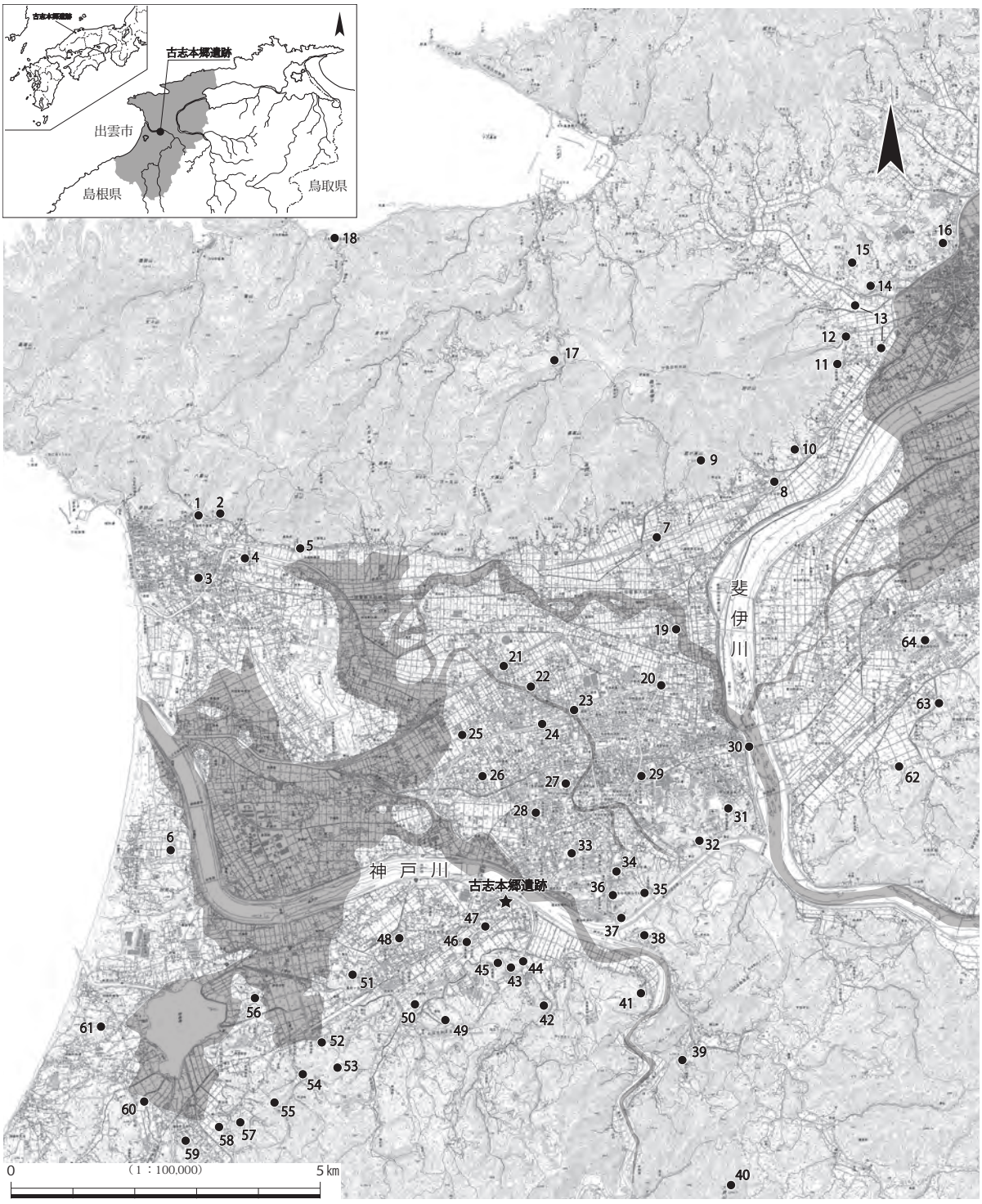
出雲平野における確実な遺跡の初現は，海進期にあたる縄文時代早期である。平野北部の山麓に所在する山持遺跡（第２図 7),菱根遺跡（第２図５）や平野西端の砂丘上に所在する上長浜貝塚（第２図６）などが知られている。中期までは山麓付近に数例の遺跡が確認されるのみである。その後，海退が進んだ後晩期になると遺跡数が増加し，山麓部付近を中心とした遺跡のほか，矢野遺跡（第２図 21)，蔵小路西遺跡（第１図 24)，壱丁田遺跡（第１図 26）など，平野中央部においても遺跡が確認されるようになる。

２　弥生時代

弥生時代になると平野部の集落が大きく発達する。縄文時代から継続して発達した矢野遺跡（第２図 21）などのほか，中期から後期を中心に急速に発達した白枝荒神遺跡（第２図 25)，古志本郷遺跡，天神遺跡（第２図 28)，中野清水遺跡（第２図 20)，青木遺跡（第２図８）など，大規模な集落が平野部各所で展開されるようになった。当該期には，これらの大規模集落を中心に吉備や九州，朝鮮半島などとの交流を示す出土品が確認されており，出雲平野を中心に各地との活発な交流があったことがわかる。そのほか特筆すべき遺跡として，後期後葉以降の「王墓」とされる巨大な四隅突出型墳丘墓が築かれた斐伊川左岸丘陵上の西谷墳墓群（第２図 31）があげられる。

３　古墳時代

古墳時代に入ると，弥生時代から継続して営まれた平野部の大規模集落は中期までに急激な衰退をみせる。中・後期に継続，再興する集落も存在するが，弥生時代のような大規模な集落の存在は明確でない。一方，平野縁辺の山麓部においては三田谷Ⅰ遺跡（第２図 37）など，中期から後期にかけ拡



1. 出雲大社境内遺跡　2. 真名井遺跡　3. 鹿蔵山遺跡　4. 原山遺跡　5. 菱根遺跡　6. 上長浜貝塚　7. 山持遺跡　8. 青木遺跡　9. 鳶ヶ巣城跡
10. 大寺古墳　11. 上島遺跡　12. 国富中村古墳　13. 源代遺跡　14. 西西郷廃寺　15. 山根垣古墳　16. 平田城跡　17. 鰐淵寺境内
18. 猪目洞窟遺物包含層　19. 萩杼古墓　20. 中野清水遺跡・中野西遺跡　21. 矢野遺跡　22. 小山遺跡　23. 姫原西遺跡　24. 蔵小路西遺跡
25. 白枝荒神遺跡　26. 壱丁田遺跡　27. 海上遺跡　28. 天神遺跡　29. 今市大念寺古墳　30. 斐伊川鉄橋遺跡　31. 西谷墳墓群
32. 長者原廃寺・菅沢古墓　33. 神門寺境内廃寺跡　34. 上塩冶築山古墳・築山遺跡　35. 上塩冶横穴墓群　36. 上塩冶地蔵山古墳
37. 三田谷Ⅰ遺跡　38. 光明寺古墳群　39. 朝山古墓　40. 戸倉城跡　41. 小坂古墳・苅山古墳群　42. 栗栖城跡　43. 浄土寺山城跡　44. 放レ山古墳
45. 妙蓮寺山古墳　46. 宝塚古墳　47. 下古志遺跡・田畑遺跡　48. 知井宮多聞院遺跡　49. 深田谷横穴墓群　50. 浅柄遺跡　51. 神門横穴墓群
52. 御崎谷遺跡・九景川遺跡　53. 北光寺古墳　54. 籠Ⅱ遺跡　55. 神西城跡　56. 山地古墳　57. 常楽寺柿木田古墳　58. 御領田遺跡・京田遺跡
59. 三部竹崎遺跡　60. 西安原遺跡　61. 板津焼山遺跡　62. 後谷遺跡・稲城遺跡・小野遺跡　63. 上ヶ谷遺跡　64. 平野古墳群・平野横穴墓群

第２図　出雲平野の主要遺跡　※網掛けは弥生時代の推定水域

大をみせる集落が確認される。古墳については，前・中期において大寺古墳（第２図 10），山地古墳（第２図 56），常楽寺柿木田古墳（第２図 57），北光寺古墳（第２図 53）などが知られている。後期後半以降になると，神戸川右岸に今市大念寺古墳（第２図 29），上塩冶築山古墳（第２図 34）など，出雲地方西部最大級の古墳が次々と築造され，古墳の築造数も急激に増加する。この頃には横穴墓も盛んに造られ，神戸川右岸の上塩冶横穴墓群（第２図 35），左岸の神門横穴墓群（第２図 51）などで特に大規模な横穴墓群が築造された。

4　古代

古代の遺跡としては，特に『出雲国風土記』記載施設の関連遺跡が注目される。官衙関連遺跡としては神門郡家と推定される古志本郷遺跡の関連遺構，出雲郡家付属の正倉跡と推定される後谷遺跡周辺（第２図 62）などが知られる。寺院関連遺跡としては朝山郡郷新造院の可能性が指摘される神門寺境内廃寺（第２図 33）などがある。神門郡家関連遺跡と推定される三田谷Ⅰ遺跡（第２図 37），神社・官衙関連遺跡と推定される青木遺跡（第２図 8）なども当該期を代表する遺跡として挙げられよう。また，光明寺３号墓（第２図 38），小坂古墳（第２図 41），菅沢古墓（第２図 32），朝山古墓（第２図 39）といった，火葬骨を納めた骨臓器を持った墳墓が神門川両岸の丘陵地を中心に分布することも注目される。

5　中世

前代から続く出雲一宮である出雲大社（第２図１）やその別当寺であった鰐淵寺（第２図 17）の存在，出雲国守護佐々木氏が出雲平野の塩冶郷に守護所を移し塩冶氏を称したことにより，鎌倉時代後半の一時期は出雲国行政上の実質的な中心地となる。礎石建物や区画溝が発見された築山遺跡（第２図 34），青磁優品が副葬された荻杼古墓（第２図 19）などは塩冶氏関連遺跡とみられる。蔵小路西遺跡（第２図 24）においては有力な国衙在庁官人であった朝山氏の居館と推定される館跡も発見されている。また，室町時代から戦国時代を中心に，毛利氏が尼子攻略戦の際に拠点とした鳶ヶ巣城跡（第２図９），神西氏代々の居城で尼子十旗にも数えられる神西城跡（第２図 55），有力な国衆であった古志氏の居城とされる浄土寺山城跡（第２図 43），栗栖城跡（第２図 42）など，数多くの山城が築かれた。

参考文献

髙橋周 2011「弥生時代の出雲平野における水域復元」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第１集　出雲弥生の森博物館

出雲市教育委員会 1997『遺跡が語る古代の出雲』

出雲市古志町誌編纂委員会 1990『古志町誌』

島根県教育委員会 1980『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』

第３章　古志遺跡群と既往の調査

第１節　古志遺跡群と調査地点の位置

古志本郷遺跡は隣接する下古志遺跡・田畑遺跡・古志遺跡・思案橋北遺跡と一体的な広がりを持つ（第３図）。これらは出雲市下古志町から古志町にまたがって約 70ha にもなる大規模な集落遺跡群を構成しており，この集落遺跡群は「古志遺跡群」と総称されている。遺跡群のほぼ全域にわたって弥生時代中期～古墳時代初頭と古代～中世の遺構・遺物が特に多く確認されており，古墳時代の一時期を除き，出雲平野の中でも有数の規模を誇った集落である。なお，古墳時代後期においても遺跡群周辺には主要な古墳が点在しており，地域的な重要性は継続していたものと考えられる。今回報告する調査地は古志遺跡群の東部，古志本郷遺跡における第 14 次発掘調査地点である。

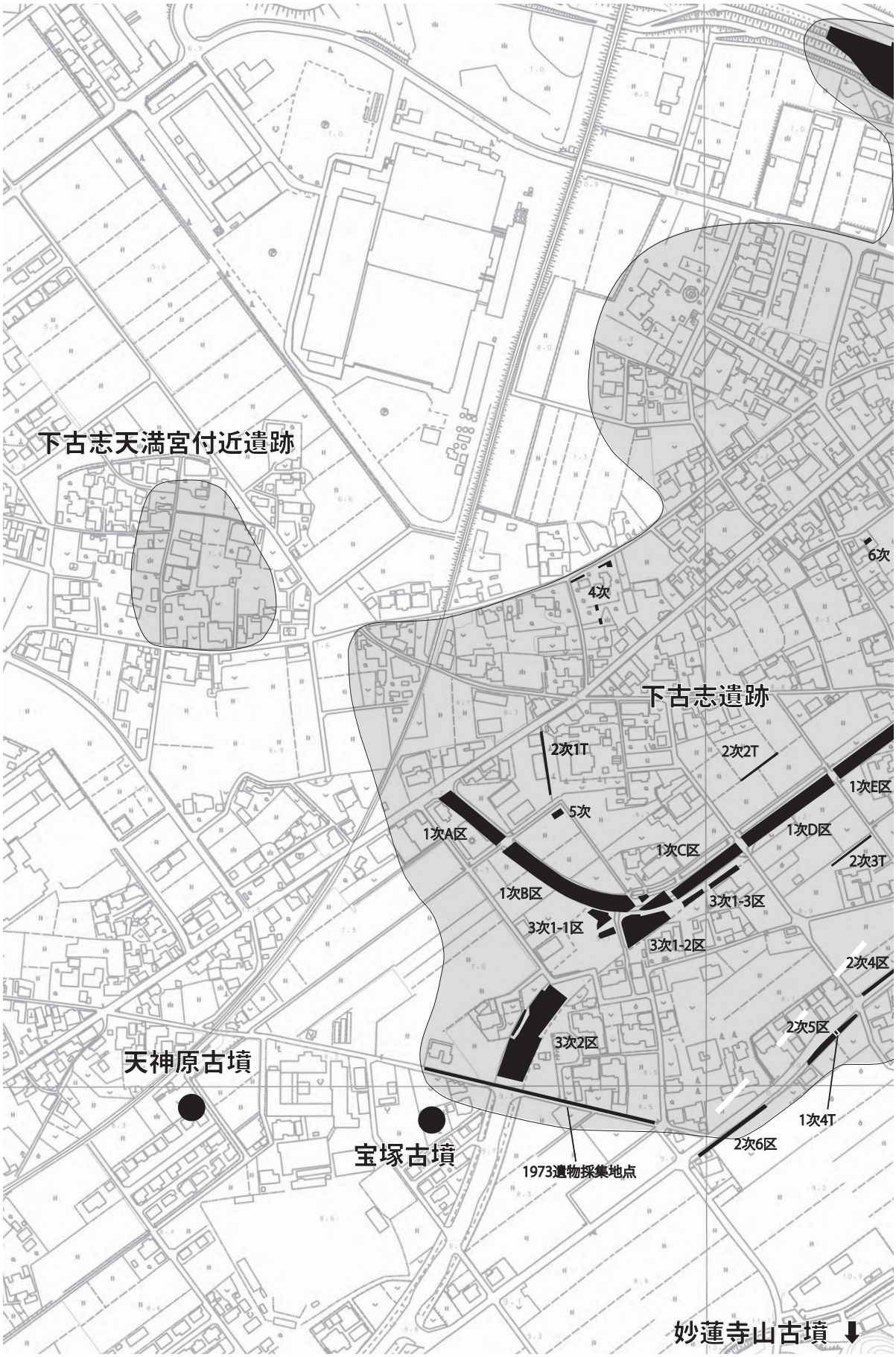
第２節　これまでの調査

古志遺跡群においては，2022（令和４）年 12 月時点で下古志遺跡で６次，田畑遺跡で２次，古志本郷遺跡で 14 次，古志遺跡で１次にわたる発掘調査が実施されている（第３図）。各調査の時期及び主な成果については第１表のとおりである。

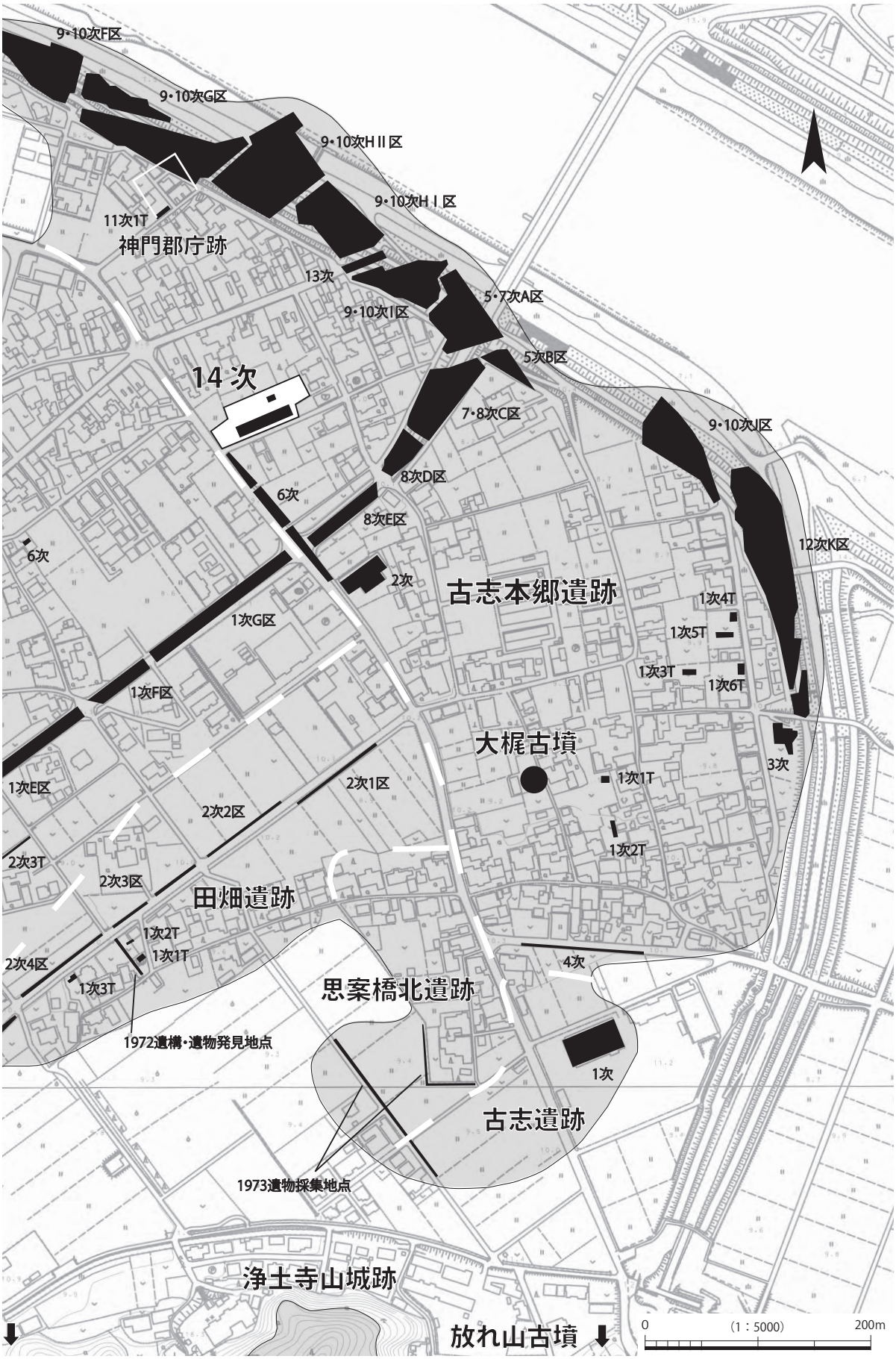
この内，下古志遺跡と古志本郷遺跡については特に広域な調査が実施されているため，以下に両遺跡を中心として調査成果の概略を述べる。

遺跡群西部に広がる下古志遺跡では，県道整備事業に伴い出雲市教育委員会が実施した第１次発掘調査が最も大規模な調査で，弥生時代中期中葉～古墳時代初頭，古代～中世の遺構・遺物が多数確認された。当初は正蓮寺北遺跡として調査が開始されたが，その広がりが確認されたことにより周辺にあった上組遺跡・弘法寺参道付近遺跡を含む新たな遺跡名として平成 11（1999）年に「下古志遺跡」と命名された。弥生時代中期から古墳時代初頭にかけては，１次調査Ａ・Ｄ・Ｅ区を中心に多条の大溝が確認され，大溝間のＡ～Ｃ区において竪穴建物・布掘建物等が集中していることも確認された。当該期における外来系遺物の存在も注目される。下古志遺跡第２・３・５次調査と田畑遺跡第１・２次調査の結果も総合すると，当該期下古志遺跡第１次調査Ａ区北端付近からＤ・Ｅ区付近へ，Ｄ・Ｅ区付近から田畑遺跡第２次調査２・３区付近へと連続する多条の溝が存在したと考えられ，その南西に建物跡が集中するようである。また，下古志遺跡第３次調査２区では東西方向にのびる多重の溝も確認されている。その後，古墳時代中期以降は遺構・遺物は極端に減少し，古代から中世にかけて再発達の様相を見せる。中世期は最も広域に遺構が分布する時期であり，６次調査では当該期の和鏡なども出土している。

遺跡群東部に広がる古志本郷遺跡では，治水事業に伴い島根県教育委員会が実施した第５・７～10・12・13 次調査が最も大規模な調査である。弥生時代中期～古墳時代前期，古代，中世後半を中心に多数の遺構・遺物確認されたほか，第９・10 次調査Ｇ・Ｈ区で弥生時代前期の溝も確認されて



第３図　古志遺跡群と調査地位置図


9・10次F区
9・10次G区
9・10次HⅡ区
9・10次HⅠ区
11次1T
神門郡庁跡
13次
9・10次I区
5・7次A区
5次B区
14次
7・8次C区
9・10次J区
8次D区
6次
8次E区
12次K区
6次
2次
古志本郷遺跡
1次4T
1次G区
1次5T
1次3T
1次6T
1次F区
大梶古墳
3次
1次1T
1次E区
2次1区
2次2区
1次2T
2次3T
2次3区
田畑遺跡
1次2T
1次1T
2次4区
4次
1次3T
思案橋北遺跡
1972遺構・遺物発見地点
1次
古志遺跡
1973遺物採集地点
浄土寺山城跡
放れ山古墳
0
(1：5000)
200m

おり，集落の初現が弥生時代前期まで遡ることが明らかとなった。弥生時代中期から後期にかけて集落は急速に発達し，南東－北西方向の大溝を伴う大規模集落となる。当該期の建物跡は弥生時代中期には第８次調査Ｅ区周辺に，後期から古墳時代前期にかけては第９・10・12 次調査Ｊ・Ｋ区周辺と第９・10 次調査Ｈ区周辺に集中するようである。古墳時代前期の内には大溝の廃絶を伴う集落の衰退も確認される。当該期には外来系遺物の存在も確認され，下古志遺跡との類似した集落の様相を示している。その後，古代になると第９・10 次調査Ｇ区とその周辺調査区で神門郡庁と郡家関連施設と推定される建物群が確認されており，神門郡における政治の中心地であったと考えられている。さらに，中世後半期には第５・７・８次調査Ａ・Ｃ～Ｅ区を中心に多くの建物跡が確認され，その周辺調査区からは広域流通品である輸入陶磁器や国産陶磁器も出土しており，出雲古志氏との関連が指摘

第１表　古志遺跡群の主な調査歴一覧

遺跡名	次数	年度（西暦）	調査主体	調査区等	主な成果	文献
下古志遺跡	1	1995-1997	出雲市	Ａ～Ｇ区	～古墳時代前期の大溝 ～古墳時代前期・古代・中世の建物等	出雲市教委 2001
	2	1999	出雲市	１～３Ｔ	～古墳時代前期の大溝等	出雲市教委 2002
	3	2010	島根県	１・２区	～古墳時代前期の溝・建物，中世の建物等	島根県 2012
	4	2019	出雲市		～中世の柱穴等	2023 報告予定
	5	2020	出雲市		～古墳時代前期の建物等，古代の井戸等	2023 報告予定
	6	2022	出雲市		中世遺構・和鏡等	未報告
	－	1973	個人	工事中採集	弥生時代～中世遺物少量	三原 2021
古志本郷遺跡	1	1987	出雲市	１～６Ｔ	～古墳時代前期の遺構等（３Ｔ遺物多量）	出雲市教委 1988
	2	1990	出雲市		弥生時代の建物等	出雲市教委 1994
	3	1993	出雲市		遺構遺物少量	出雲市教委 1995
	4	1995	出雲市		遺構少量，古代遺物中心	出雲市教委 1999
	5	1995	島根県	Ａ・Ｂ区	古墳時代前期・中世の建物等	島根県教委 1999
	6	1995	出雲市		～古墳時代前期の大溝	出雲市教委 1998
	7	1996	島根県	Ａ・Ｃ区	～古墳時代の大溝，古代中世の建物等（Ｃ区）	島根県教委 1999
	8	1997	島根県	Ｃ～Ｅ区	弥生時代・中世の建物等（Ｄ・Ｅ区）	
	９・10	1998-2000	島根県	Ｆ・Ｇ区	神門郡家跡及び関連施設等 弥生時代前期・古墳時代前期・後期の溝等	島根県教委 2003a
			島根県	Ｈ区	弥生時代前期・～古墳時代前期の溝 ～古墳時代前期・古墳時代後半～中世建物等	島根県教委 2001a
			島根県	Ｊ区	弥生時代の建物，古墳時代後半～古代建物等	
			島根県	Ｉ区	～古墳前期の溝，中世土壙墓等	島根県教委 2001b
	11	1999	出雲市	１Ｔ	神門郡庁跡に伴う柱穴等	出雲市教委 2002
	12	1999-2000	島根県	Ｋ区	～古墳時代前期の溝・建物等	島根県教委 2003b
	13	2001	島根県		～古墳時代前期・中世の溝等	島根県教委 2002
	14	2021	出雲市		本書	本書
田畑遺跡	1	1988	出雲市	１～４Ｔ	弥生時代の溝（１Ｔ）・建物（３Ｔ）	出雲市教委 1989
	2	1997-1998	出雲市	１～６区	弥生時代の溝等，中世遺構等	出雲市教委 2000
	－	1972	個人	工事中採集	柱穴・弥生土器等	東森 1973
古志遺跡	1	2003	出雲市		古代の建物等	出雲市教委 2005
思案橋北遺跡	－	1973	個人	工事中採集	古代瓦（一部古志遺跡か）	三原 2021

されている。

その他，注目すべき遺跡として遺跡群南部の思案橋北遺跡がある。昭和 48（1973）年，工事中に採集された多量の古代瓦の存在から，『出雲国風土記』記載の古志郷新造院がこの付近に存在していた可能性が指摘されている。

参考文献

髙橋周 2011「弥生時代の出雲平野における水域復元」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第 1 集　出雲弥生の森博物館

東森市良 1973「破壊に瀕している低湿地遺跡」『季刊文化財』第 20 号　島根県文化財愛護協会

三原一将 2021「寄贈資料の古志遺跡群出土遺物について」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第９集　出雲弥生の森博物館

出雲市教育委員会 1988『古志地区遺跡分布調査報告書』

出雲市教育委員会 1989『神門地区遺跡詳細分布調査報告書』

出雲市教育委員会 1994『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第４集

出雲市教育委員会 1995「古志本郷遺跡」『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第５集※古志本郷３次

出雲市教育委員会 1998『市道本郷新宮線道路改良工事に伴う古志本郷遺跡第６次発掘調査報告書』

出雲市教育委員会 1999『古志地区土地改良総合事業地内古志本郷遺跡発掘調査報告書』

出雲市教育委員会 2000『田畑遺跡』市道浅柄古志線歩道設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

出雲市教育委員会 2001『下古志遺跡』一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

出雲市教育委員会 2002『古志本郷遺跡　下古志遺跡』平成 11 年度古志遺跡群範囲確認調査報告書

出雲市教育委員会 2005『古志遺跡』古志運動広場等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島根県教育委員会 1999『古志本郷遺跡Ⅰ』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

島根県教育委員会 2001a『古志本郷遺跡Ⅱ』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ

島根県教育委員会 2001b『蟹谷遺跡・上沢Ⅲ遺跡・古志本郷遺跡Ⅲ』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ

島根県教育委員会 2002『古志本郷遺跡Ⅳ・放れ山横穴墓群・只谷間府・上沢Ⅲ遺跡（分析編）』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅣ

島根県教育委員会 2003a『古志本郷遺跡Ⅴ』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅥ

島根県教育委員会 2003b『古志本郷遺跡Ⅵ』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅦ

島根県教育委員会　2012『下古志遺跡（第３次調査）』一般県道多伎江南出雲線地域活力基盤創造交付金（交通安全）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第４章　調査の成果

第１節　調査の概要

１　調査方法の概要（第５図）

調査は，重機により表土を掘削した後，手掘りによって徐々に掘り下げ，遺構・遺物の検出を行った。調査区は事業地南部の建築本体基礎工部約 550㎡をⅠ区，北部の浄化槽掘削工部約 50㎡をⅡ区と呼称する。また，遺構・遺物の位置については東西方向アラビア数字表記，南北方向アルファベット表記によって区分した５ｍグリッドを基準として調査を進めた。

２　土層堆積状況（第４図）

基本層序は，上から①客土・耕作土等②暗褐色土等（近世以降堆積土等）③黒褐色土（中世以前遺物包含層）④暗褐色土・砂混合層を経て，遺構基盤層であるにぶい黄褐色砂質土・灰白色砂層に至る。基盤層の標高は 8.3 ～ 7.8 ｍ程度で，北から南へ向けて低くなっている。④層上面においても遺構は確認できるが，遺構の検出は淡黄色～灰白色砂層で一括して行った。

３　遺構の概要（第５図）

遺構は調査区全域において柱穴・土坑・溝等を多数検出した。遺構の時期は弥生時代中期後葉から中世まで幅広く確認できるが，その多くが中世期の遺構であると考えられる。確実な中世期以外の遺構としては，Ⅰ区で検出した弥生時代中期末～後期初頭の遺物を伴う土坑ＳＫ７と古墳時代後期～奈良時代頃の遺物を伴う土坑ＳＫ８，ＳＫ８以前の掘削である溝ＳＤ６が確認できる程度である。

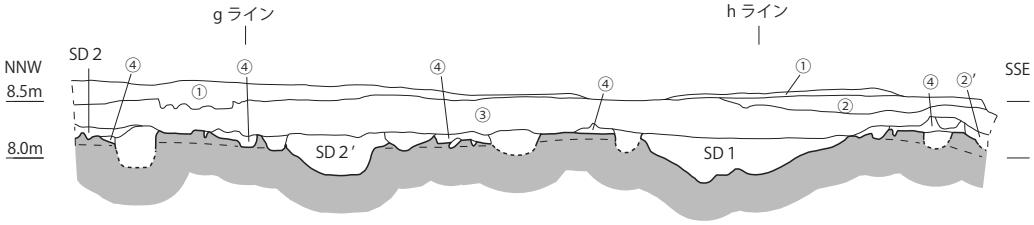
中世期の特筆すべき遺構として，Ⅰ区で検出した溝ＳＤ１，ＳＤ２が挙げられる。調査区の東北東－西南西方向を縦断するように平行して走る溝で，いずれも 15 世紀前後の遺物を確認している。溝ＳＤ２は調査区東端で北方へ屈曲しており，中世の屋敷跡に伴う１辺 50 ｍ以上の区画溝と考えられる。

３　遺物の概要

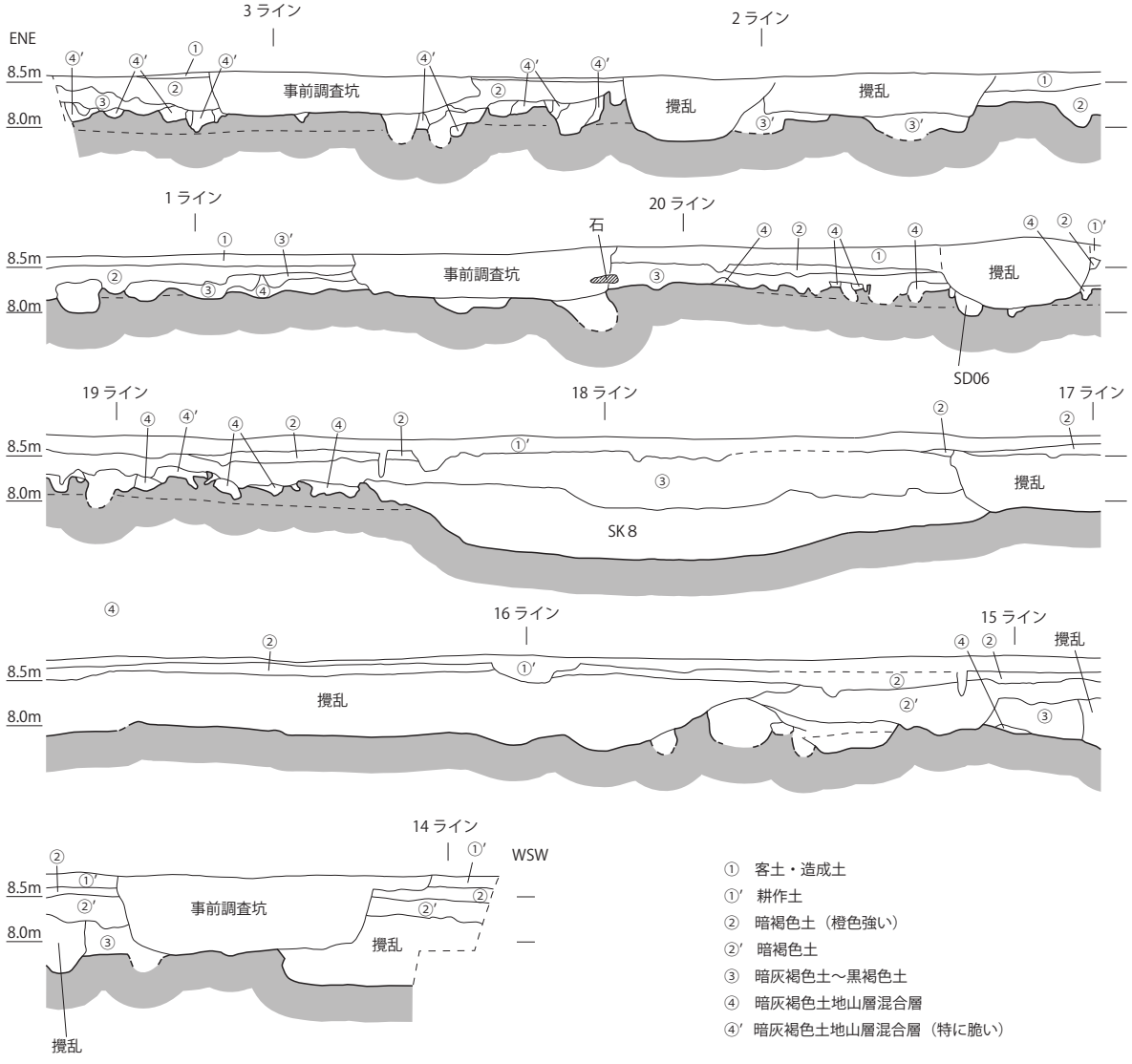
出土遺物としては，弥生時代中期後葉～後期初頭を中心とする弥生土器，古墳時代後期～古代の須恵器・土師器・土製品，中世の土師器・陶磁器・鉄製品などが確認できる。出土遺物の大半は小片であり，出土量も比較的少ない。前述した遺構密度の状況からは中世期以外の遺物についてもその大半が中世期に流入した資料であることが想定できる。

中世期において特筆すべき資料としては，Ⅰ区の溝ＳＤ１，ＳＤ２，土坑ＳＫ９等から出土した龍泉窯系の青磁が挙げられる。

Ⅰ区 東壁土層図



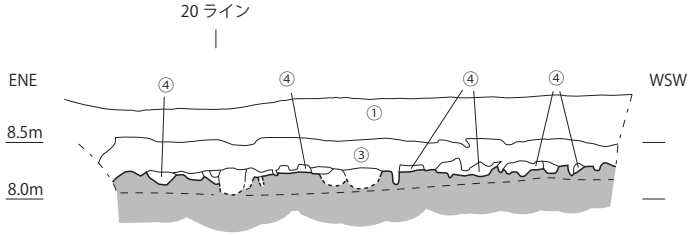
Ⅰ区　南壁土層図

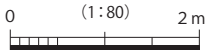


① 客土・造成土
①′ 耕作土
② 暗褐色土（橙色強い）
②′ 暗褐色土
③ 暗灰褐色土～黒褐色土
④ 暗灰褐色土地山層混合層
④′ 暗灰褐色土地山層混合層（特に脆い）

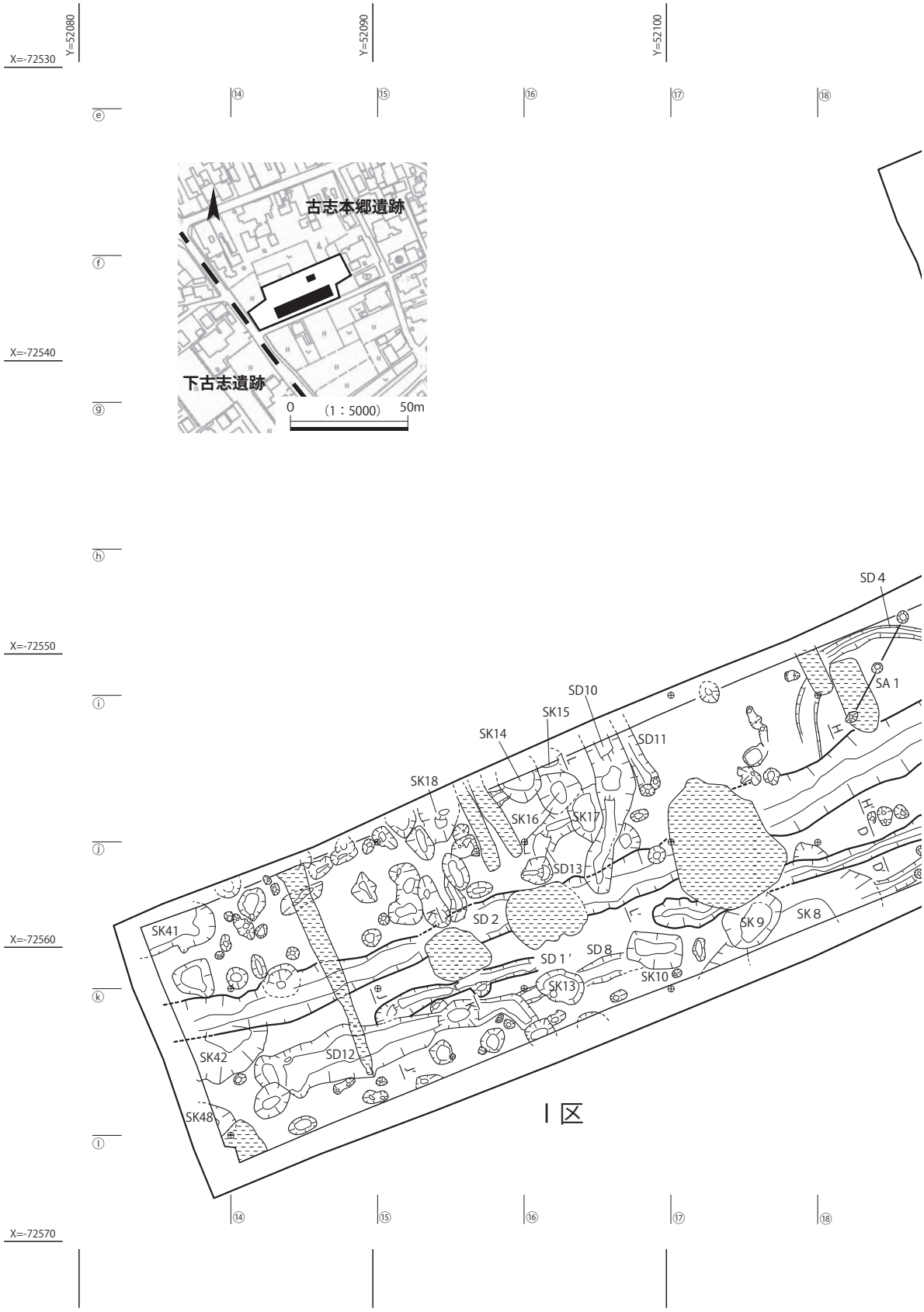
基盤層
上層　にぶい黄褐色砂質土（砂含み，下層へ漸次的に変化）
下層　灰白色砂層

Ⅱ区 南壁土層図

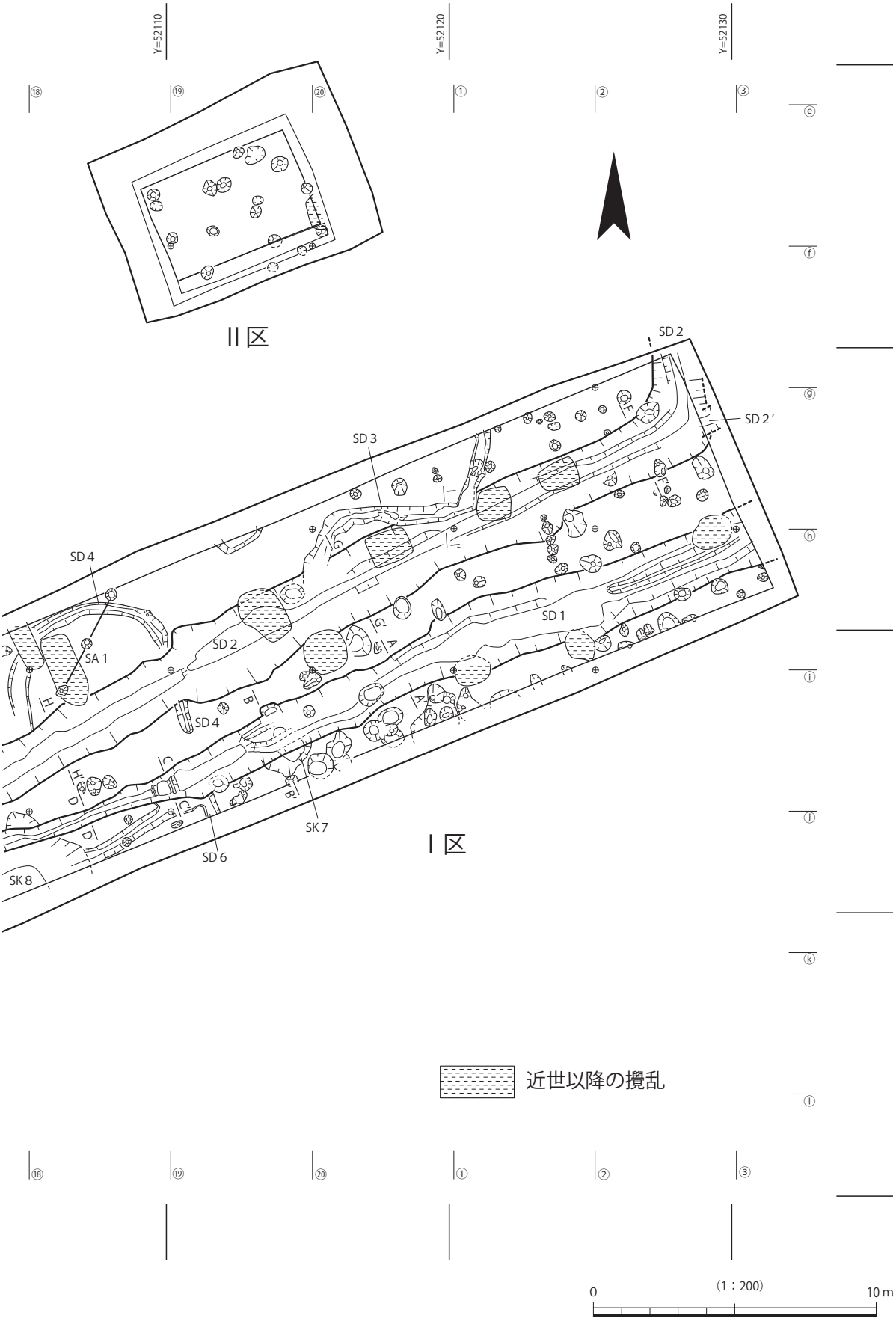




第４図　調査区土層堆積状況実測図


Y=52080
Y=52090
Y=52100
X=-72530
X=-72540
X=-72550
X=-72560
X=-72570
⑭
⑮
⑯
⑰
⑱
ⓔ
ⓕ
ⓖ
ⓗ
ⓘ
ⓙ
ⓚ
ⓛ
古志本郷遺跡
下古志遺跡
0
（1：5000）
50m
SD 4
SA 1
SD10
SK15
SK14
SD11
SK18
SK16
SK17
SD13
SD 2
SK41
SK 9
SK 8
SD 1′
SD 8
SK10
SK13
SK42
SD12
SK48
Ⅰ区

第 5 図　遺構配置図


Y=52110
Y=52120
Y=52130
⑱
⑲
⑳
①
②
③
ⓔ
ⓕ
ⓖ
ⓗ
ⓘ
ⓙ
ⓚ
ⓛ
II区
SD 2
SD 2′
SD 3
SD 4
SA 1
SD 2
SD 1
SD 4
SK 7
SD 6
SK 8
I区
近世以降の攪乱
0
(1：200)
10 m

第２節　遺構

１　溝

ＳＤ１・1′・８・１２（第５・６図，巻頭図版２，図版３）　ＳＤ１は，Ｉ区南寄りで検出した東北東－西南西方向に伸びる溝である。Ｉ区中央部を縦断する溝ＳＤ２とほぼ平行して掘削されている。検出長は約 33 ｍであるが，西南西方向の延長線上にＳＤ１′・８・12 といった同一方向に伸びる溝を断続的に検出しており，本来は調査区を縦断する同一の溝であった可能性が高い。その場合，延長 50 ｍを超える規模の溝となる。残存状況の良好な東部で幅約 2.2 ｍ，深さ約 0.5 ｍを測る。少なくとも１回の掘り返しが行われており，横断面Ｗ形となる箇所が複数見られる。底面の標高は一定しないが，概ね標高 7.5 ～ 7.8 ｍで推移する。調査区東壁面と調査区中央部のＤ－Ｄ′断面の底はともに標高 7.6 ｍであり，明確な傾斜は伴わない。なお，同一の溝と想定したＳＤ１′・８・12 の底はいずれも標高 7.75 ｍ前後であり，ＳＤ１と類似した標高を示す。なお，ＳＤ８に繋がる土坑ＳＫ 10・13 もＳＤ８の底面に対して 15㎝未満の非常に浅い土坑状遺構であり，明確な埋土の違いも確認できなかった。一連の遺構であった可能性を考慮すべきであろう。後述する土坑ＳＫ 48 についてもＳＤ 12 と同様関係性を持つ可能性がある。

出土遺物は弥生時代から中世までの資料が混在して出土しているが，時期判別可能な中世遺物は 14 ～ 16 世紀前半の範疇に納まるものであり，中世後期の溝と考えられる。

ＳＤ２・2′（第５・７図，巻頭図版３，図版４・５）　ＳＤ２は，Ｉ区中央部を縦断して検出した東北東－西南西方向に伸びる溝である。調査区東端でＳＤ２′と連結し，溝本体は北方へと屈曲する。前述のとおり，東北東－西南西方向の区間ではＳＤ１と平行しており，両者は同一期の区画溝として掘削された可能性が高い。いずれも屋敷跡等の区画に伴うものであろう。東北東－西南西延長 50m以上，残存状況の良好な箇所で幅約 2.2m，深さ約 0.6mを測る。底面の標高は一定しないが，調査区西壁面の底で標高 7.45m，調査区東端付近Ｆ－Ｆ′断面の底で標高 7.5mであり明確な傾斜は伴わない。

出土遺物は弥生時代から中世までの資料が混在しているが，時期判別可能な中世遺物は 14 世紀～16 世紀前半頃までの範疇に全て納まるものであり，ＳＤ１とほぼ同時期のものと考えて矛盾ない。

ＳＤ３（第５・７図）　ＳＤ３は，Ｉ区 g20 グリッド周辺で検出した溝で，北東－南西方向に蛇行する。幅約 0.6 ｍ，深さ 0.15 ｍ前後を測る小規模な溝である。

掘削時期は不明だが，溝ＳＤ２埋没後に掘削されている。

ＳＤ４（第５・８図，図版６）　ＳＤ４は，Ｉ区 h18 グリッド周辺で検出した溝で，南南東に向けて開くＵ字形の平面形を呈する。溝は幅 0.4 ～ 0.7 ｍ，深さ 0.1 ～ 0.15 ｍを測り，残存する平面形規模は北北西－南南東方向約 6.0 ｍ，東北東－西南西 6.2 ｍを測る。

掘削時期は不明だが，溝ＳＤ２以前に掘削されている。竪穴建物の痕跡である可能性もあるが，関連する柱穴等も確認できず性格も不明である。

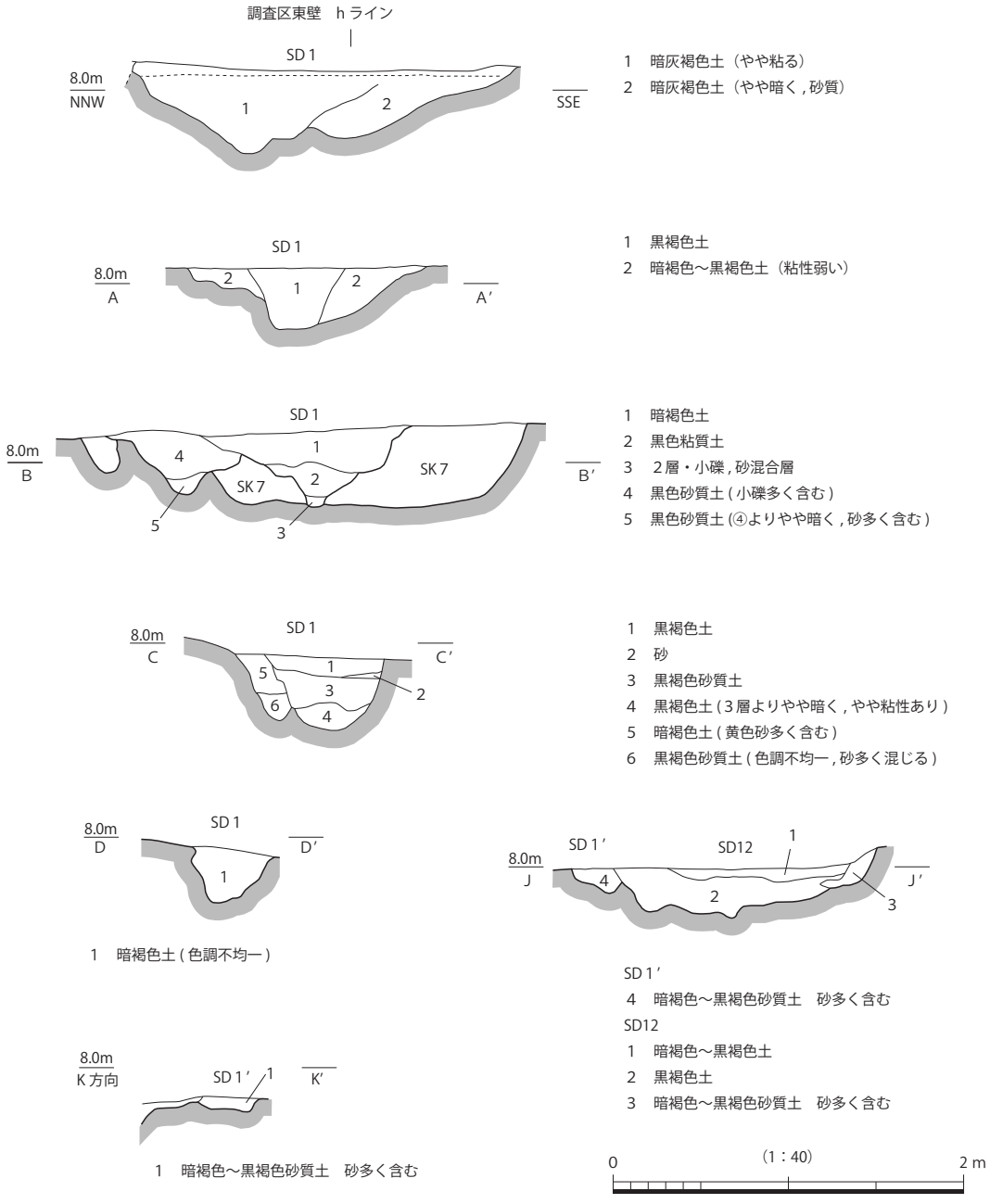
ＳＤ６（第５・８図，図版６）　ＳＤ６は，Ｉ区 j18 グリッド周辺で検出した溝で，東北東－西南西方

向に伸び，東端で南南東方向へ屈曲する。幅 0.5 m前後，深さ 0.15 m前後を測る。

掘削時期は不明だが，溝ＳＤ１と土坑ＳＫ８以前に掘削されている。後述する土坑ＳＫ８の時期から８世紀以前の遺構であると考えられる。

ＳＤ１０（第５・９図，図版７）　ＳＤ 10 は，Ｉ区 i16・j16 グリッドで検出した溝で，南北方向にやや蛇行して伸び，南端で溝ＳＤ２に合流する。幅約 1.4 m前後，深さ 0.5 m前後を測る。底面の標高は 7.5 m前後で，合流地点においては溝ＳＤ２の底面標高より 0.15 m程度低くなる。

出土遺物は 14 世紀末から 15 世紀頃までの資料が出土しており，溝ＳＤ１・２と近似した時期の



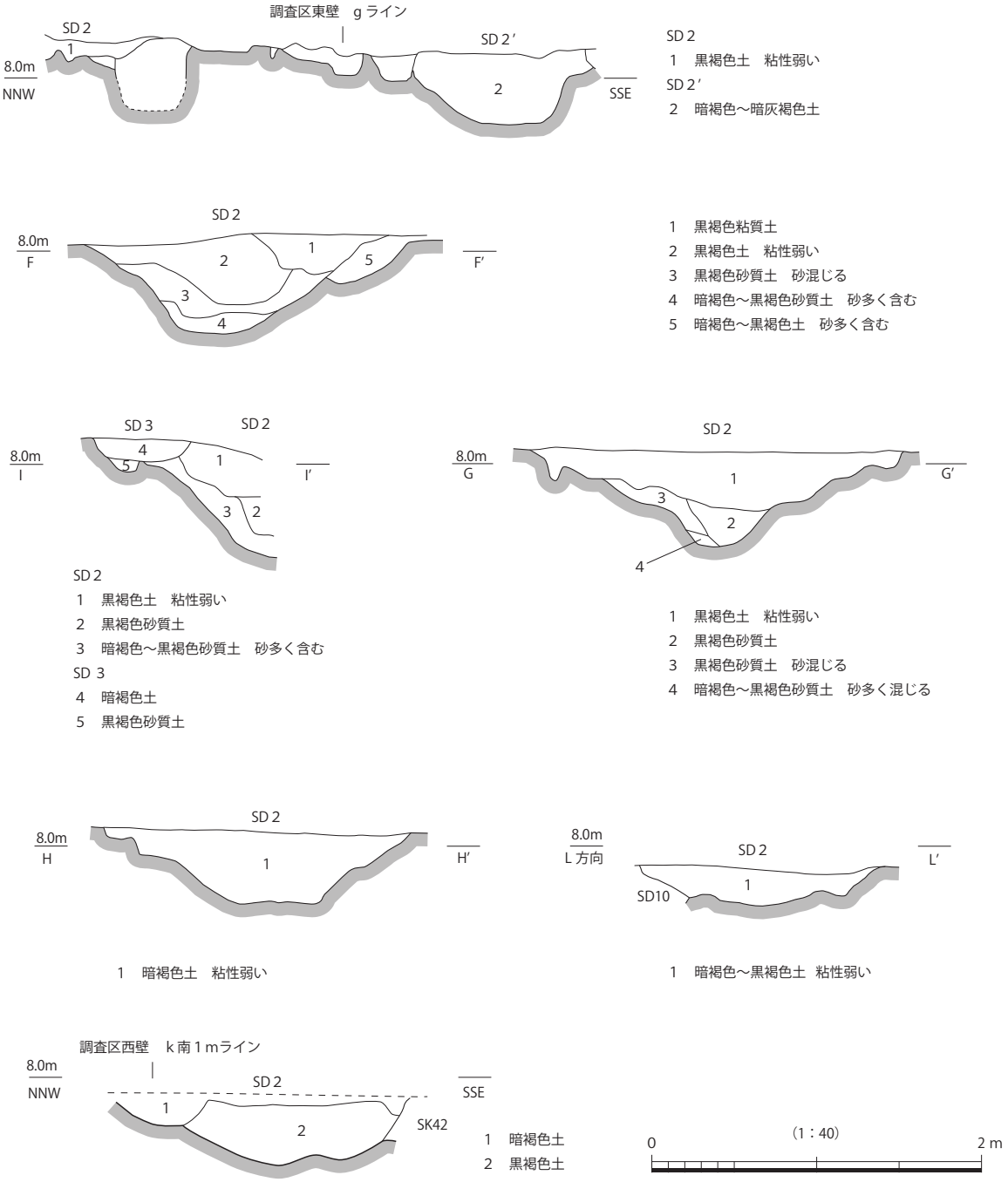
第６図　SD １・SD １′・SD ６・SD12 土層堆積状況実測図

掘削と考えられる。ただし，土層堆積状況からは溝ＳＤ２より先に埋没したことが確認できる。

ＳＤ１１（第５・９図，図版７）　ＳＤ 11 は，溝ＳＤ 10 の東に隣接する溝で，北北西－南南東方向にやや屈曲して伸び，南方で消失する。幅約 0.6 m，深さ 0.15 ～ 0.25 mを測る小規模な溝である。

掘削時期は不明だが，溝ＳＤ 10 以前に掘削されている。

ＳＤ１３（第５・９図，図版７）　ＳＤ 13 は，溝ＳＤ 10 の西に隣接する溝で，北東－南西方向にやや屈曲して伸びる。密集する他の遺構によって損壊著しいが，溝ＳＤ 10 と類似した方向に伸びている。



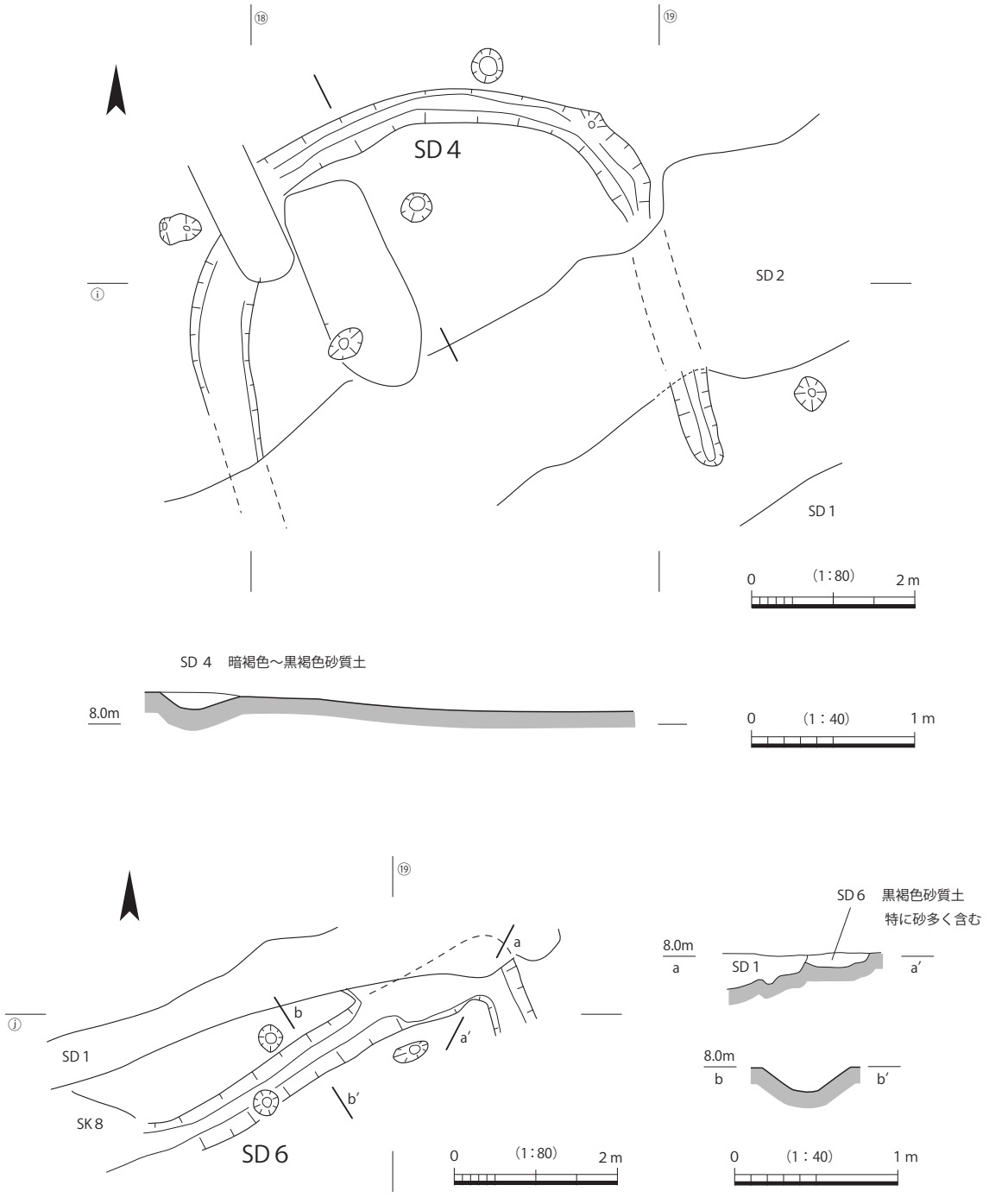
第７図　SD ２・SD ２′・SD ３土層堆積状況実測図

幅 0.9 m前後，深さ 0.6 m前後を測る。

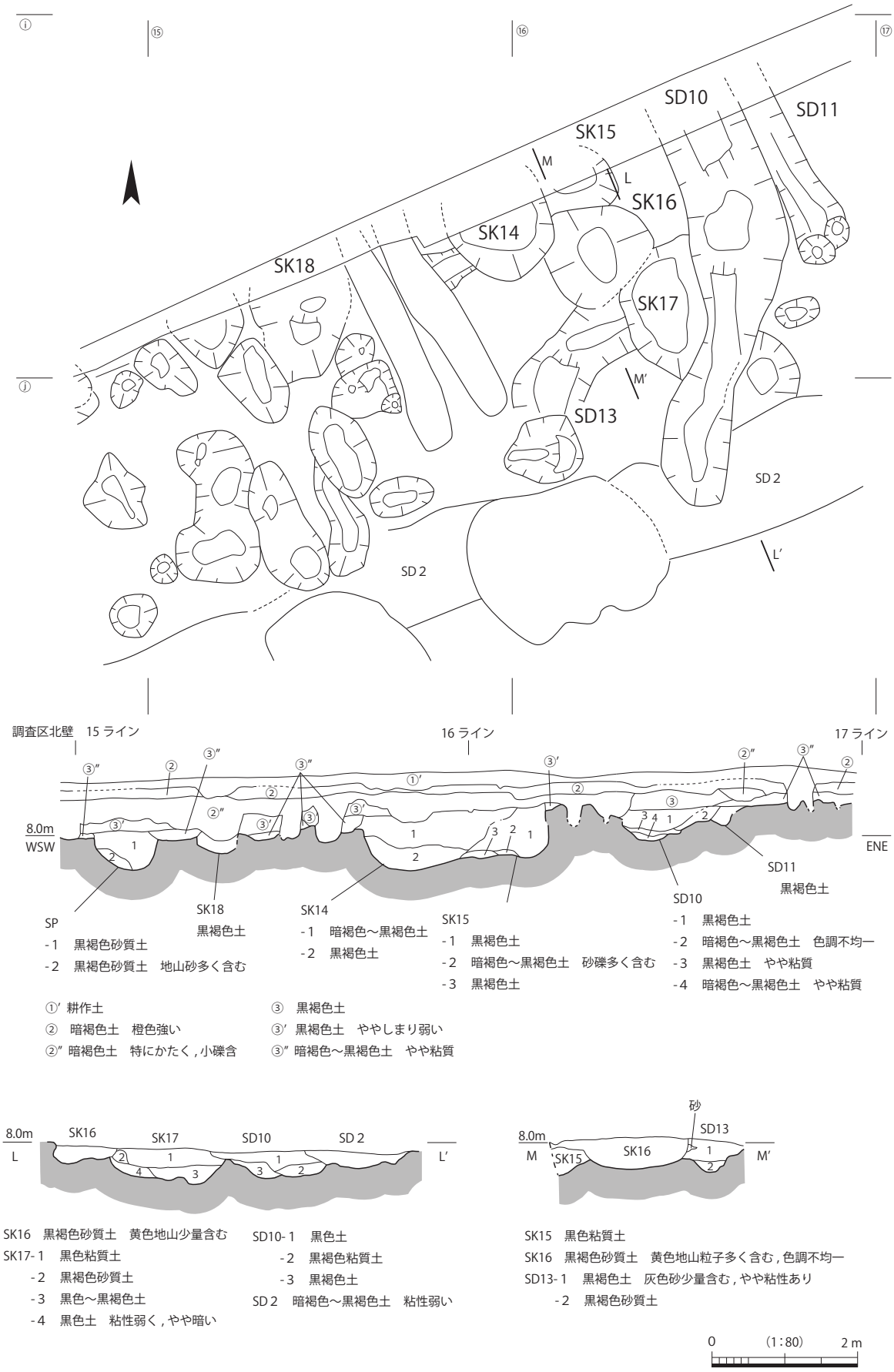
溝ＳＤ 10・土坑ＳＫ 17 以前に掘削されている。溝ＳＤ 10 と同様の機能を想定するとすれば，掘削時期は 15 世紀を大きくは遡らないものと考えられる。14 世紀頃であろうか。

２　土坑

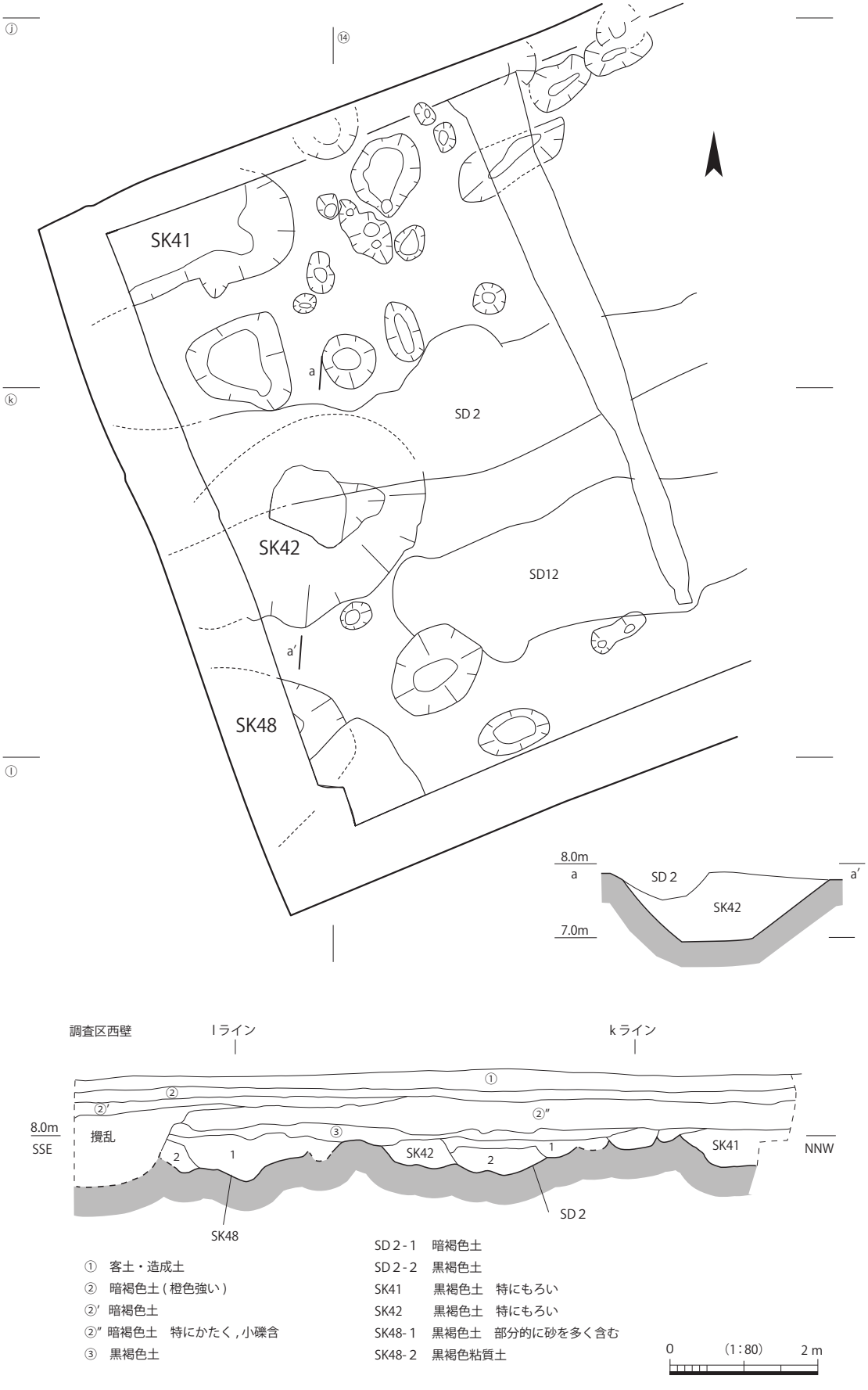
ＳＫ１４～１８（第５・９図，図版７）　ＳＫ 14 ～ 18 は，Ⅰ区 i15・16 グリッド周辺，溝ＳＤ 10・



第８図　SD ４・６遺構実測図



第９図　i15･16 グリッド周辺遺構群実測図



第 10 図　j14･k14 グリッド周辺遺構群実測図

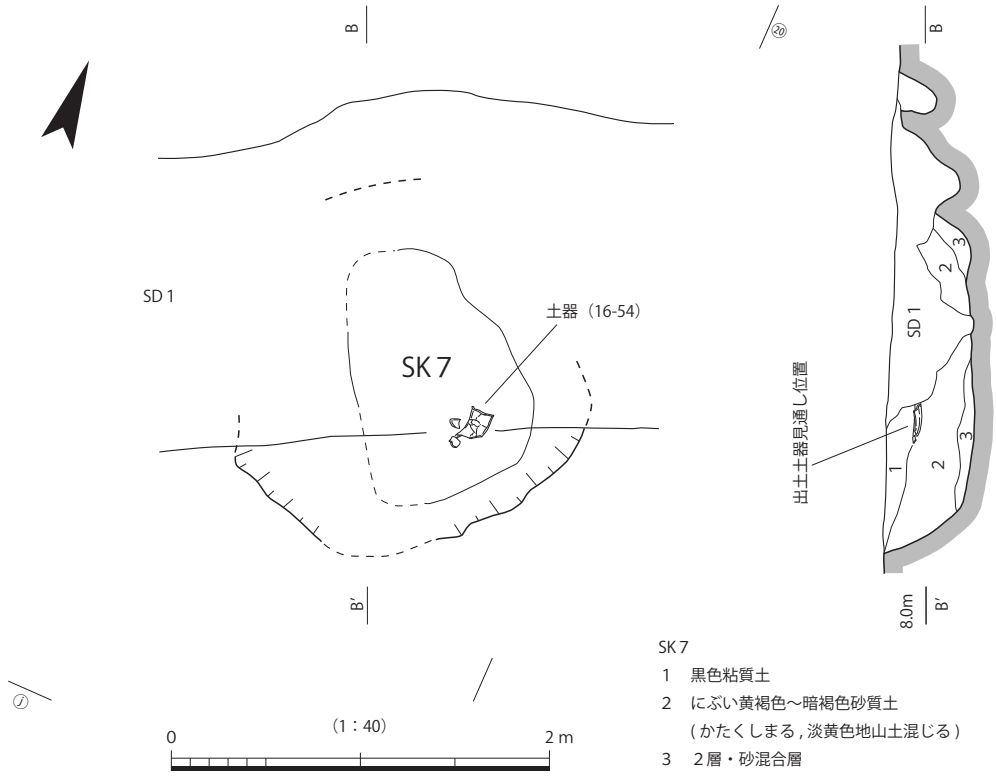
11 以西に密集して検出した土坑群である。いずれも径 1.5 ～ 2.0 m程度，深さ 0.5 ～ 0.7 m程度の円形または楕円形の平面形を有する土坑である。

土層堆積状況及び検出状況から，ＳＫ 15・17 →ＳＫ 16 →ＳＫ 14 の掘削順序が確認できる。ＳＫ 17 は溝ＳＤ 13 以後，溝ＳＤ 10 以前に掘削されている。ＳＤ 13 と同様に，掘削時期は 15 世紀を大きくは遡らないものと考えられる。14 世紀頃であろうか。他の土坑も 14 ～ 15 世紀を中心とした時期の掘削であろう。

ＳＫ４１・４２・４８（第５･10 図，図版８）　ＳＫ 41・42・48 はＩ区西端部，i14・k14 グリッド周辺で検出した土坑群である。ＳＫ 41･48 については形状の想定も困難であるが，いずれも深さ 0.5 m前後を測る。最も大形の土坑であるＳＫ 42 は楕円形条の平面形になるとみられ，長軸 3.3 m以上，短軸 2.6 m前後，深さ 0.9 mを測る。なお，ＳＫ 48 については溝ＳＤ 12 の延長線上にあり，底面の標高も約 7. 5 mで，ＳＤ 12 の最も深い地点と大きく差異は無い。ＳＤ 12 の底面の名残である可能性も考慮しておくべきであろう。

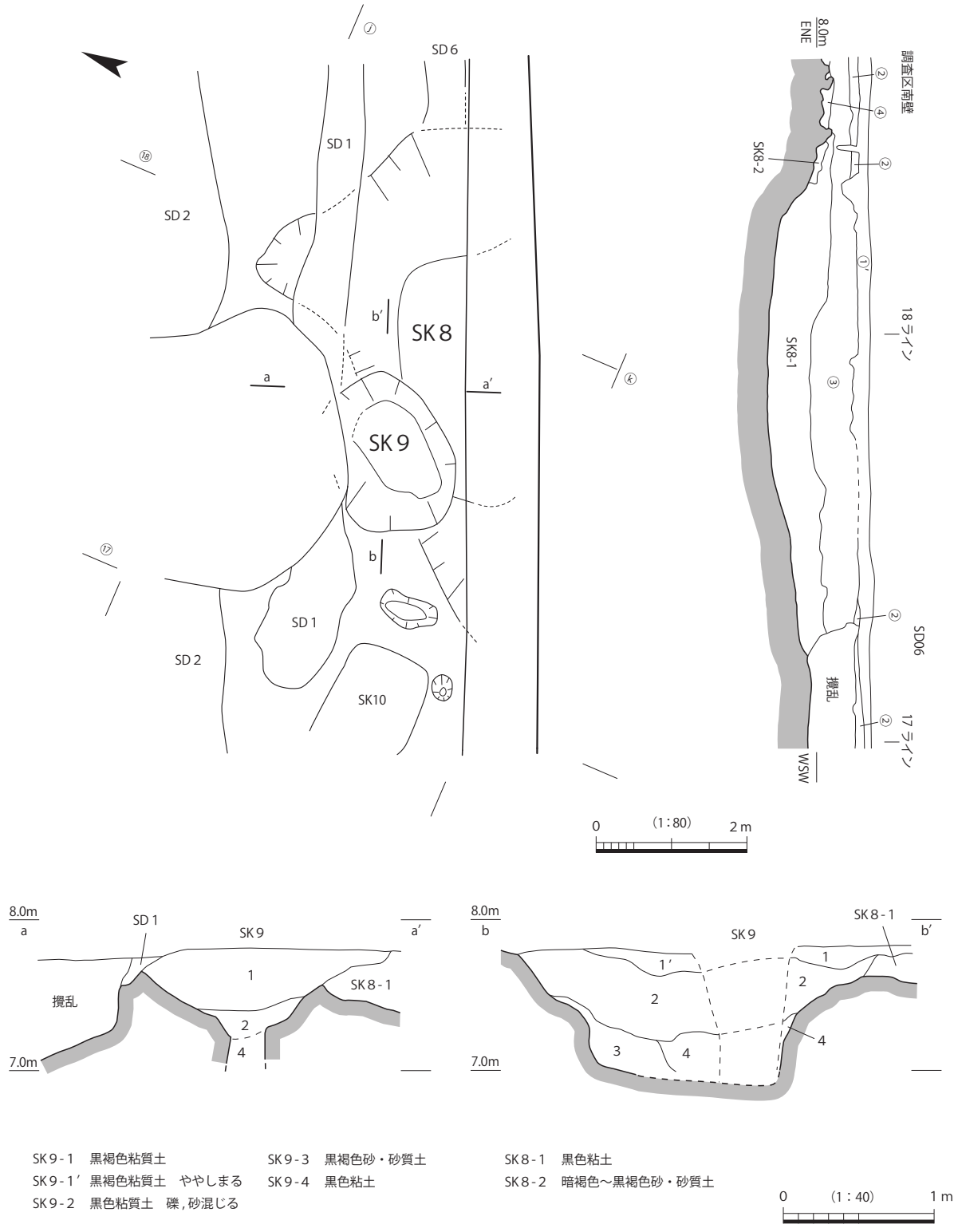
いずれの土坑も掘削時期不明だが，ＳＫ 42 については鉄釘，龍泉窯系青磁の小片が出土しており，溝ＳＤ２以前に掘削されている。14 世紀頃であろうか。

ＳＫ７（第５･11 図，図版９）　ＳＫ７はＩ区 i19 グリッドで検出した土坑である。遺構の約３分の２が溝ＳＤ１により破壊されているが，上端の復元径は 2.0 ～ 1.9 m程度となる。下端の遺存状態は比較的良好で，長辺 1.3 m，短辺 0.9 mの北西－南東方向に長い歪な楕円形状の平面形を呈する。深さ



第 11 図　SK ７遺構実測図

は約 0.5 を測る。本来の埋土上面と考えられる堆積土②層上面から弥生土器甕が出土している。中世の溝ＳＤ１の掘削時に大半が欠損しているが, 本来は完形の土器を設置または破砕したものであろう。土坑墓等として利用が想定できる。



SK９- １　黒褐色粘質土
SK９- １′ 黒褐色粘質土　ややしまる
SK９- ２　黒色粘質土　礫 , 砂混じる
SK９- ３　黒褐色砂・砂質土
SK９- ４　黒色粘土
SK８- １　黒色粘土
SK８- ２　暗褐色～黒褐色砂・砂質土

第 12 図　SK ８· ９遺構実測図

出土した弥生土器は弥生時代中期後葉～後期初頭頃のもので，掘削の時期も同様と考えられる。

ＳＫ８（第５･12 図，図版９）　ＳＫ８はＩ区 j17・18 グリッドで検出した土坑状の遺構で，調査区外南南東方向へと広がる。検出範囲及び調査区壁面の状況から，南西－北東方向 6.9 m以上，南東－北西方向 3.2 m以上の平面規模が確認でき，深さは約 0.8 mを測る。土坑としては大形で，平面規模に比して浅い特徴を持つ。性格は不明である。

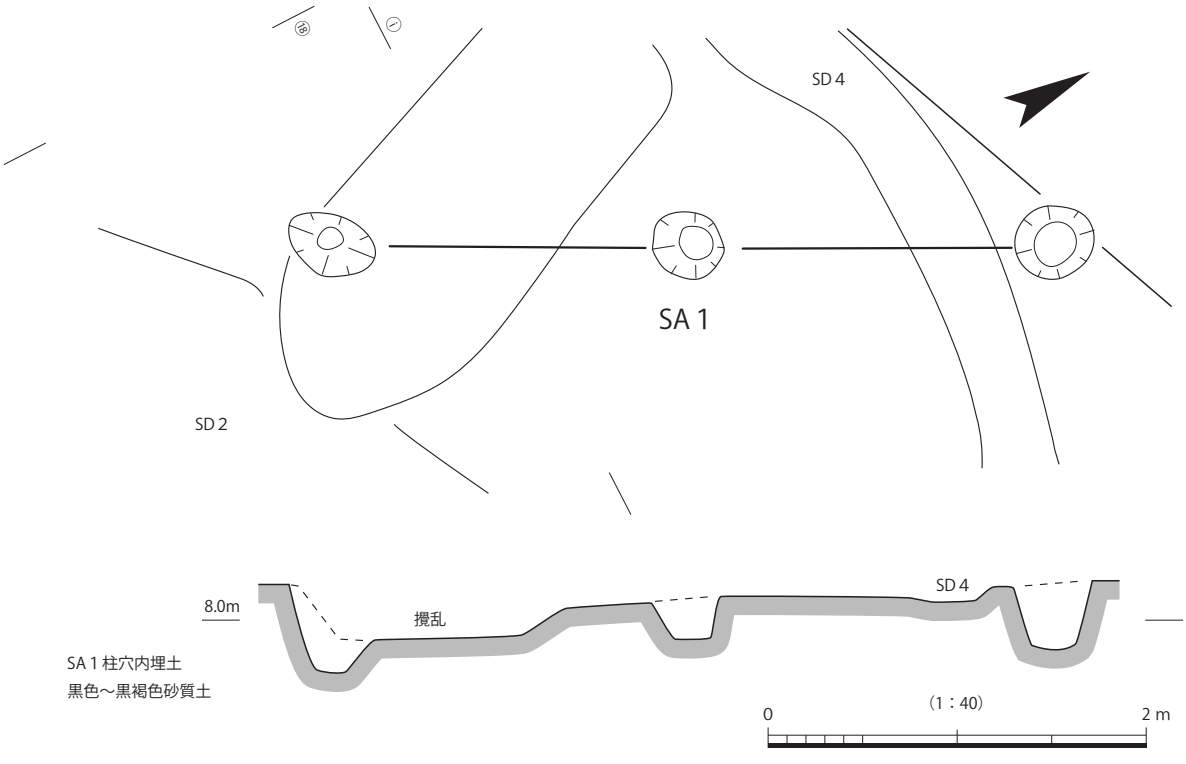
出土遺物には須恵器･土製支脚等の破片が確認でき，中世以降まで降る時期の遺物は確認できない。６～８世紀頃の掘削であろう。なお，溝ＳＤ１・土坑ＳＫ９以前，溝ＳＤ６以後に掘削された遺構であることも確認できる。

ＳＫ９（第５･12 図，図版 10）　ＳＫ９はＩ区 j17 グリッドで検出した土坑である。楕円形状の平面形を呈し，検出面で長軸 2.15 m，短軸 1.6 m前後を測る。土層堆積状況からは長軸 2.45 m前後，短軸 1.7 m前後の規模が想定され，深さは 0.85 mである。

出土遺物には 14 世紀後半～ 15 世紀前半期の青磁椀などが含まれ，遺構の時期もこれに近いものと考えられる。なお，溝ＳＤ１以前，土坑ＳＫ８以後に掘削された遺構であることも確認できる。

３　柱穴

ＳＡ１（第５･13 図，図版６）　柱穴群の内，唯一整然とした配置が確認できたＩ区 h18 グリッド付近で検出した柱穴列である。柱穴は今回の調査区域においては比較的小規模な径 40㎝前後，本来の深さ 40㎝前後を測り，約 1.9 m間隔で南西－北東方向に３穴が並んでいる。延長方向の北東側は調査



第 13 図　SA1 遺構構実測図

区外，南西側には溝ＳＤ２が位置し，更に延長していた可能性がある。柵列であろうか。

掘削時期は不明であるが，６～８世紀の土坑ＳＫ８と軸が類似している。

その他の柱穴群（第５図）　ＳＡ１を除き明確な並びが把握できる柱穴はないが，調査範囲全域において多くの柱穴と思われる遺構を確認した。傾向としてｉグリッド以南では径 60 ～ 90㎝程度，深さ 40㎝程度のやや大形の柱穴が，ｈグリッド以北では径 30㎝前後，深さ 30㎝前後の小形の柱穴が中心に分布している。基本的には黒色～黒褐色土・砂質土が埋土である。

第３節　遺物

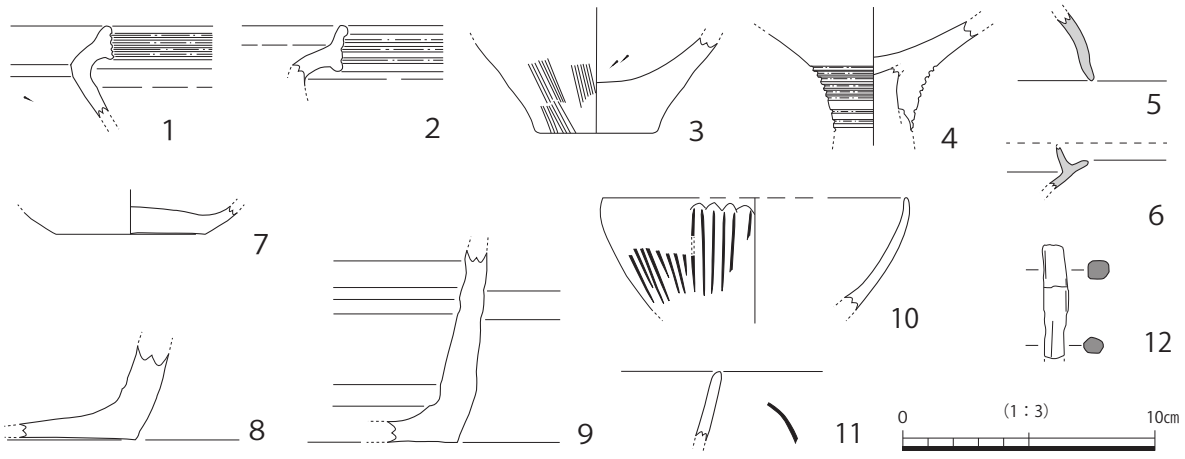
１　遺構内出土遺物（第 14 ～ 16 図，巻頭図版４，図版 12 ～ 14）

遺構内出土遺物については，その大半が流入品とみられる破片資料である。唯一土坑ＳＫ７については遺構に意図的に配置されたと考えられる遺物が確認できた。

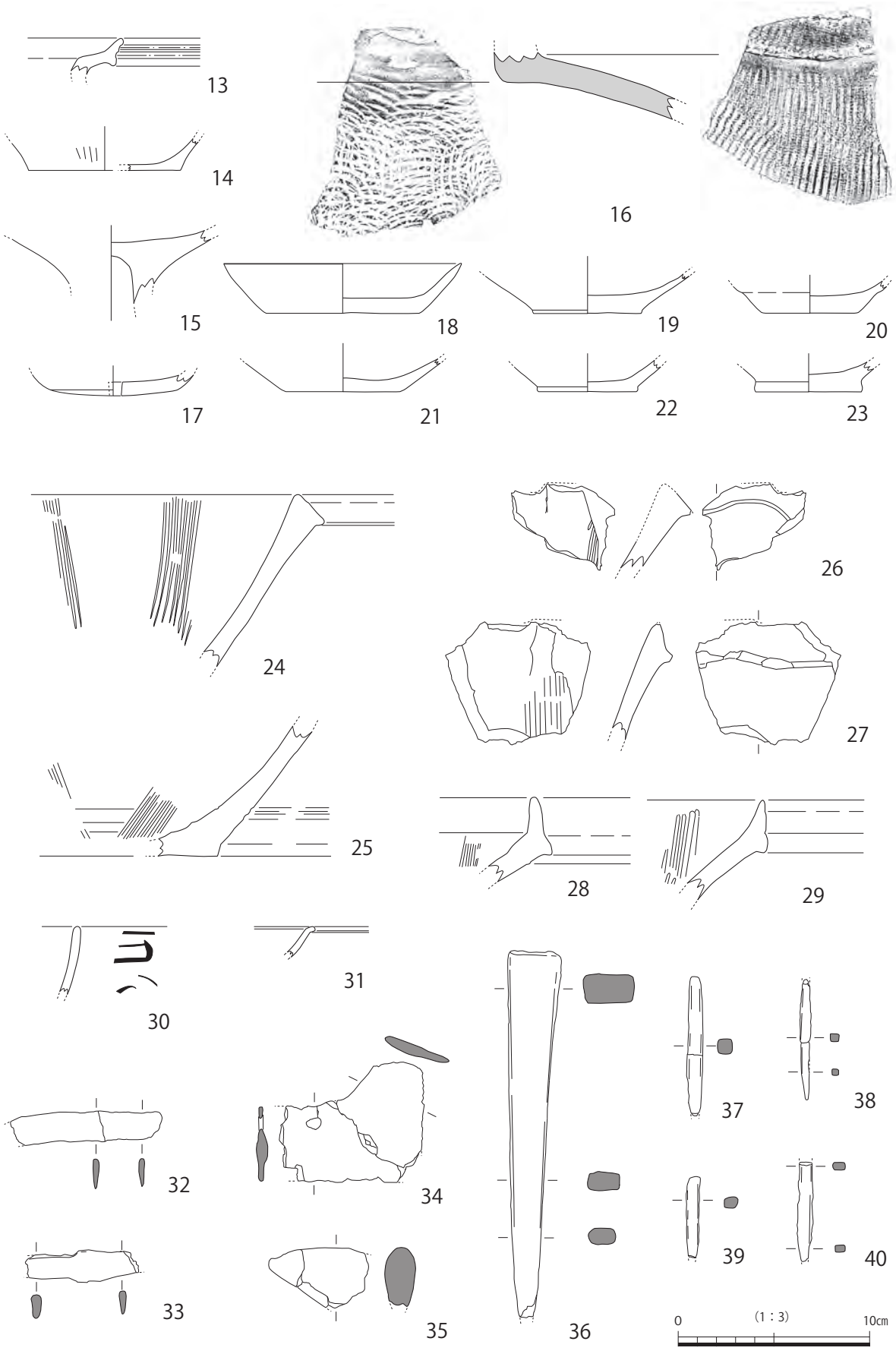
ＳＤ１出土遺物（第 14 図）　ＳＤ１では弥生土器，須恵器，土師器，陶磁器，金属器等（１～ 12）が混在して出土している。

１～６は遺構掘削以前の混入遺物と考えられる。１～４は弥生土器で，１～３が甕，４が高杯である。弥生時代中期後葉～後期初頭前後の資料と考えられる。５・６は須恵器で，５が杯蓋，６が杯身である。古墳時代後期後半頃の資料と考えられる。

７～ 12 は遺構に伴うと考えられる時期の遺物である。７は土師器杯または皿の底部で，底部外面には回転糸切痕が残る。８・９は陶器で，備前系の甕等底部である。10・11 は龍泉窯系の青磁椀で，10 には細かい線描きの蓮弁文が，11 には大きな線描きの蓮弁文が確認できる。12 は棒状鉄製品である。欠損しており，本来の形状は不明である。７～ 11 の遺物の時期は 14 世紀後半～ 16 世紀前半の範疇に納まるもので，埋没時期の参考となる 10 の青磁椀は 15 世紀後半～ 16 世紀中葉頃の様相を示す。



第 14 図　SD1 出土遺物実測図

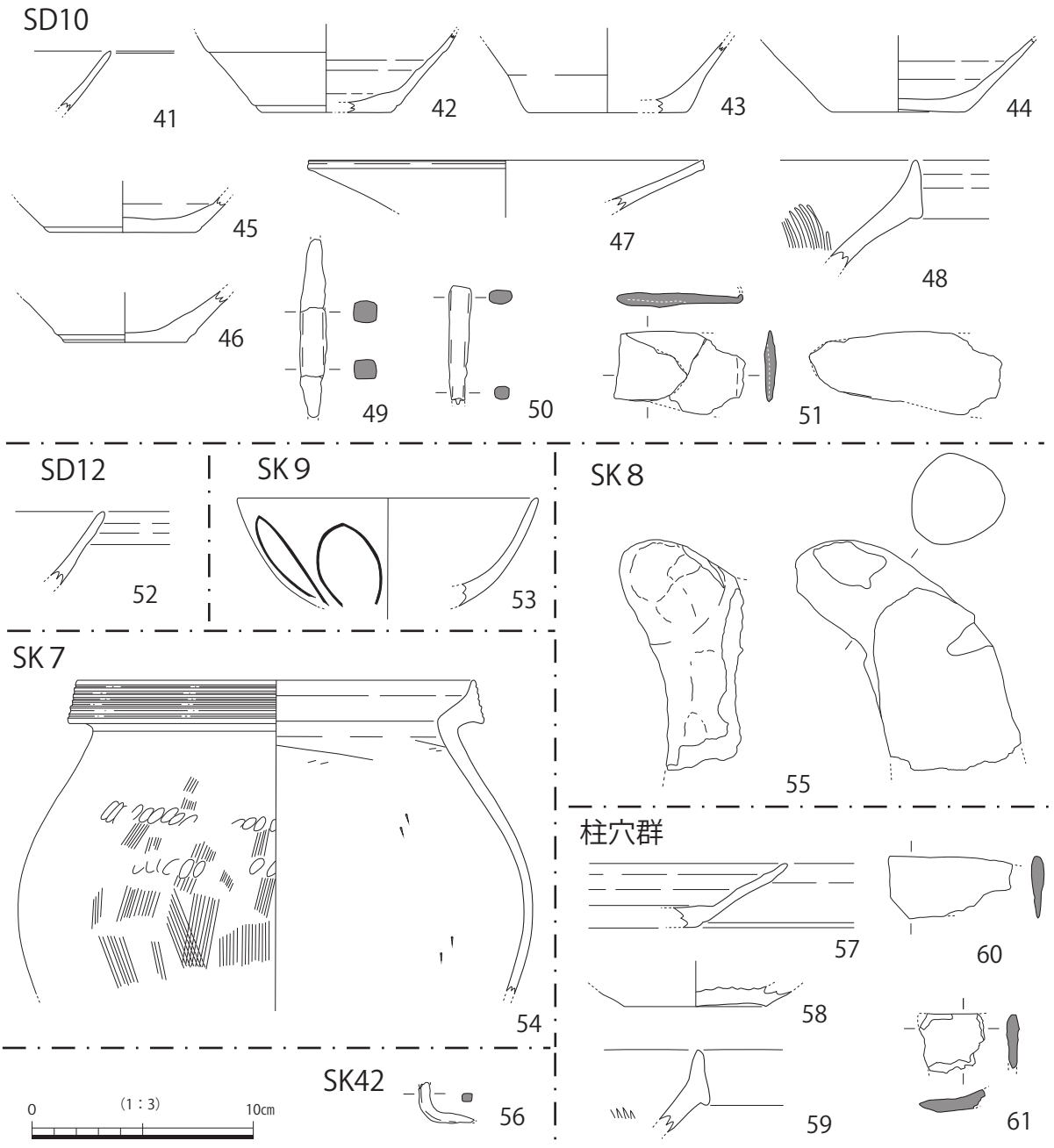


第 15 図　SD2 出土遺物実測図

ＳＤ２出土遺物（第 15 図）　ＳＤ２では弥生土器，須恵器，土師器，陶磁器，金属器等（13 ～ 40）が混在して出土している。

13 ～ 16 は遺構掘削以前の混入遺物と考えられる。13・14 は弥生土器甕等で，弥生時代中期後葉～後期前半の範疇で捉えられる。15 は土師器の高杯である。16 は須恵器甕で，体部内外面にタタキを施しており，外面には口縁部貼付前のタタキ痕が残存している。15・16 は古墳時代後期を前後する頃であろうか。

17 ～ 40 は遺構に伴うと考えられる時期の遺物である。17 ～ 23 は土師器杯または皿で，底部外



第 16 図　その他遺構内出土遺物実測図

面には回転糸切痕が残る。17 には底部穿孔が見られる。24 ～ 29 は陶器で，備前系の擂鉢である。26・27 の口縁部には片口が確認できる。30 は龍泉窯系の青磁椀，31 は白磁皿である。30 の青磁椀には線描きの雷文帯と大きな蓮弁文が確認できる。32 ～ 40 は鉄製品で，大半が 19 グリッド以東で出土している。32・33 が刀子，34・35 は用途不明品である。36 ～ 40 は端部の一方が尖る傾向にある鉄製品で，鉄釘等の可能性が考えられる。36 は特に大形の製品で，残存長 19.2㎝，最大幅 2.8 m，最大厚 1.6㎝を測る。17 ～ 31 の遺物の時期は 14 世紀後半～ 16 世紀前半の範疇に納まるものである。埋没時期の参考となる 28・29 の擂鉢は 15 世紀中葉～ 16 世紀初頭頃，31 の白磁は 15 世紀中葉～ 16 世紀中葉頃の様相を示す。

ＳＤ１０出土遺物（第 16 図）　ＳＤ 10 では土師器，陶器，金属器等（41 ～ 51）が出土している。いずれも遺構に伴うと考えられる時期の遺物である。

41 ～ 47 は土師器の杯または皿で，底部外面には回転糸切痕が残る。48 は陶器で，備前系の擂鉢である。49 ～ 51 は鉄製品である。49 は端部両端が尖る傾向が見られ，50 は端部の一方が尖る傾向にある。50 は鉄釘等であろうか。51 は両刃状の横断面形を有する板状鉄製品である。２箇所以上を意図的に折り曲げた状態で出土している。41 ～ 48 の遺物の時期は 14 世紀～ 16 世紀前半の範疇に納まるもので，埋没時期の参考となる 47 の土師器は 15 世紀後半～ 16 世紀初頭頃，48 の擂鉢は 15 世紀中葉～ 16 世紀初頭頃の様相を示す。

ＳＤ１２出土遺物（第 16 図）　ＳＤ 12 では土師器・陶磁器の小片が出土している（52）。図化可能であった資料は 52 の土師器椀のみであるが，細かい線描きの蓮弁文が確認できる龍泉窯系青磁椀体部小片も確認した。ＳＤ１・２・10 と類似した時期として矛盾ない。

ＳＫ７出土遺物（第 16 図）　ＳＫ７では遺構埋土上面から 54 の弥生土器の甕１点が出土している。口縁拡張部に６条の凹線文，肩部外面に２列の刺突文が施される。弥生時代中期後葉～後期初頭の様相を示す。

ＳＫ８出土遺物（第 16 図）　ＳＫ８では須恵器甕小片・土製品などが出土している（55）。小片も含め中世期まで降る資料は混入しておらず，遺構に近似した時期の資料と考えて良いであろう。

図化可能であった資料は 55 の土製支脚のみである。上部の約１/2 と脚端部が欠損しているが，背面に非貫通孔があり，頭部に２方向の突起を持つものと思われる。６～８世紀頃の資料であろう。

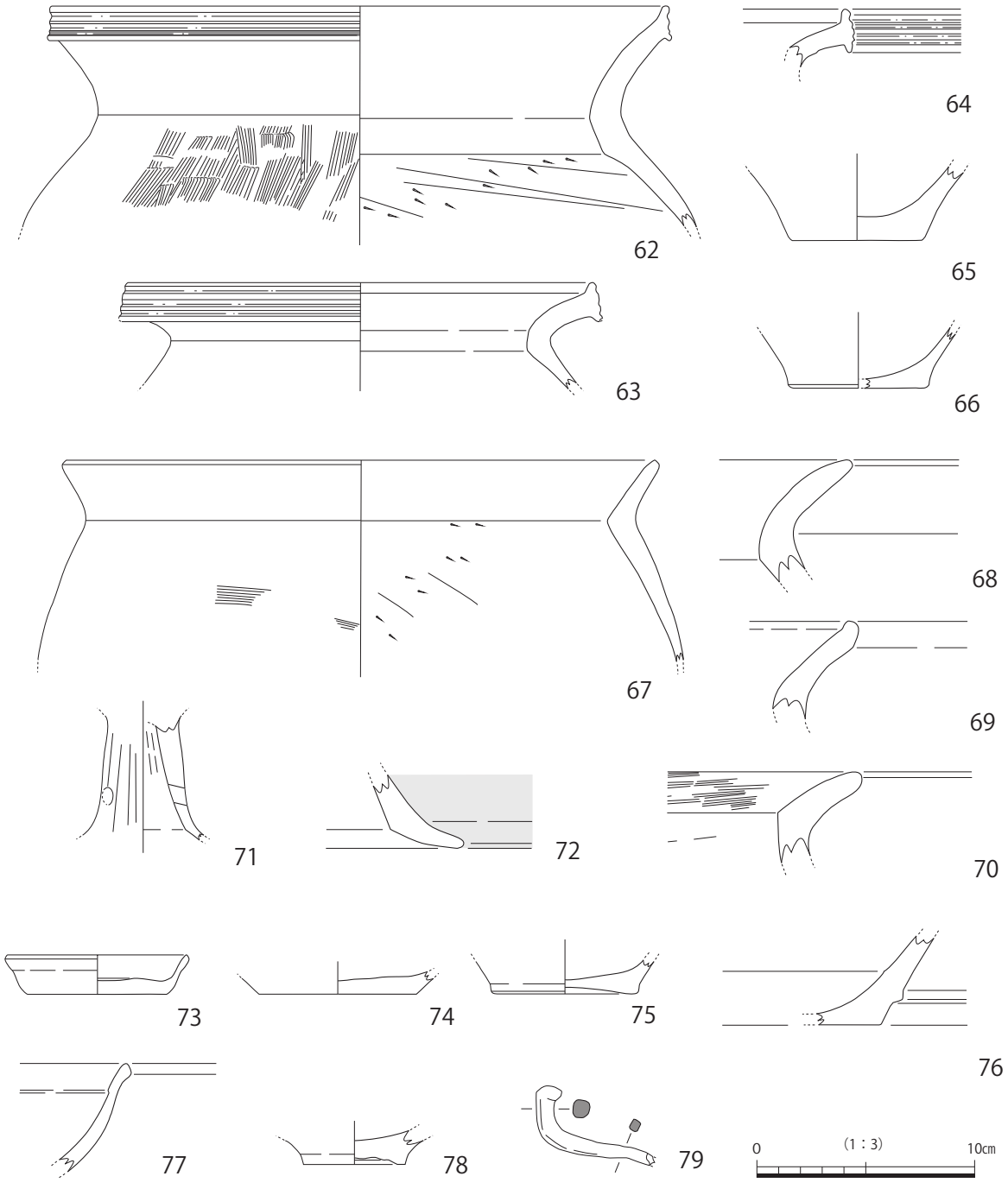
ＳＫ９出土遺物（第 16 図）　ＳＫ９では龍泉窯系青磁が出土している（53）。復元口径 13.6㎝を測る椀で，外面には大きな線描きの蓮弁文が確認できる。14 世紀後半～ 15 世紀前半頃の様相を示す。

ＳＫ４２出土遺物（第 16 図）　ＳＫ 42 では陶磁器小片，56 の鉄釘の小片が出土している。陶磁器は図化できなかったが，立体感の無い鎬蓮弁文が確認できる龍泉窯系青磁椀体部小片も確認した。13 世紀中葉～ 14 世紀初頭前後のものであろう。必ずしも遺構の時期を示すものではないが，ＳＤ２以前の時期として矛盾ない。

柱穴群出土遺物（第 16 図）　Ｉ区の穴群柱から数点の遺物が確認された（57 ～ 61）。いずれも混入品と考えられ必ずしも遺構の時期を示すものではない。57・58 は土師器の杯または皿，59 が備前系の擂鉢である。60・61 は鉄製品で，60 は刃部を有する。

２　遺構外出土遺物（第 17 図，巻頭図版 4，図版 13・14）

遺構外出土遺物については，基本層序③④層出土遺物のほか，表土掘削・工事立会時出土遺物，攪乱土内混入遺物から比較的残存状況の良好な資料を抽出して図示している。なお，掲載図の内 67・69 は事業用地南端部外縁擁壁工における工事立会で発見したものであり，調査区外からの出土品で



第 17 図　遺構外出土遺物実測図

あるが，ＳＤ６・ＳＫ８付近から出土している。

62 ～ 66 は弥生土器である。62 ～ 64 は甕，65・66 は甕等の底部で，62 ～ 64 の口縁拡張部には３～４条の凹線文が施される。最も残存状態が良い 62 の資料はⅠ区 i19 グリッド周辺から表土掘削時に発見したもので，同一グリッド内に弥生時代の土坑ＳＫ７を確認していることも特筆しておく。いずれも弥生時代中期後葉を前後する時期の資料と考えられる。

67 ～ 72 は古墳時代から古代にかけての土師器である。67 ～ 70 は甕，71・72 は高坏等の脚部である。71 の脚部には３方向の円形スカシ孔と外面ミガキ調整が確認できる。72 の外面には赤色塗彩が確認できる。71 は古墳時代前期頃，その他は６～８世紀を前後する時期の資料であろう。

73 ～ 75 は土師器である。いずれも杯または皿の底部で，73・74 には底部外面には回転糸切痕が残る。74・75 は中世の資料，73 の皿は近世まで降るものであろう。

76 は瓦質土器鉢の底部である。底付近の外面に１条の突帯が確認できる。外面が研磨されていることも特徴である。15 ～ 16 世紀頃のものであろう。

77・78 は青磁の椀である。77 は無文で口縁端部が屈曲する。14 世紀後半～ 15 世紀前半頃の様相を示す。78 は高台畳付近無釉である。

79 は鉄釘である。頭部はつぶれて肥厚しており，使用した痕跡が明確である。

第５章　総　括

第１節　遺跡の変遷

今回の調査においては，Ⅰ区において①弥生時代中期後葉～後期初頭前後②古墳時代後期～奈良時代前後③中世後期の３時期の遺構・遺物を主に確認している。Ⅱ区の遺構ついては並びの整列しない柱穴のみであり，時期判定も困難であった。ここで各期におけるⅠ区の遺構の概観を整理する（第18図）。

１　弥生時代中期後葉～後期初頭前後

当該期の遺構は非常に希薄である。確認できる確実な遺構は，土坑墓としての性格が想定されるＳＫ７のみであった。その他，後述ＳＫ８以前の遺構であるＬ字形の溝ＳＤ６，竪穴建物等の痕跡の可能性があるＵ字形の溝ＳＤ４等が比較的古い遺構として想定できるが，詳細な時期は不明であり，古墳時代後期以降まで降る可能性もある。

一方，遺構の希薄さに比して弥生時代の遺物は中世後期の溝ＳＤ１・２内への混入品をはじめ，ＳＤ１・２を破壊する近世の攪乱土内，ＳＫ７周辺の遺構外等から一定量の資料が出土している。後世に相当数の遺構が破壊されたと見るべきであろう。

２　古墳時代後期～奈良時代前後

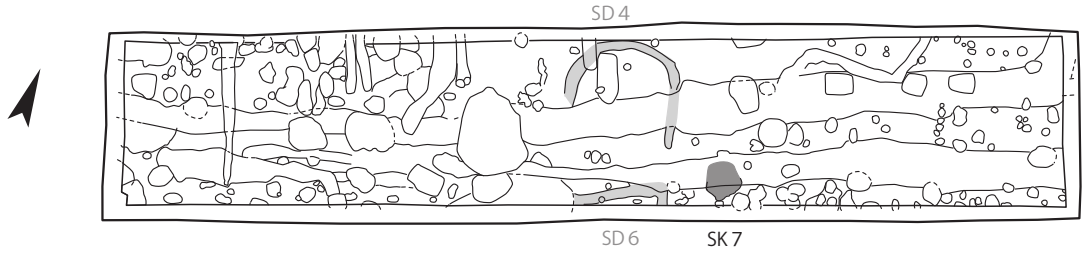
当該期においても遺構は非常に希薄である。確認できる確実な遺構は，長辺6.9ｍ以上を測る大形の土坑状遺構ＳＫ８のみであった。その他は，前時期と同様にＳＤ４・６等が比較的古い遺構として想定できるほか，ＳＫ８の長軸と類似した方位に並ぶ柱穴列ＳＡ１も当該期の遺構である可能性がある。この内ＳＤ６についてはＳＫ８以前の遺構であることが確認できる。

遺物については，前時期と同様に中世後期の溝ＳＤ１・２内への混入品をはじめ，ＳＤ１・２を破壊する近世の攪乱土内から一定量出土するほか，ＳＫ８周辺～ＳＤ４・ＳＡ１西方隣接エリアにおいて少量の遺物が散布する。やはり後世に相当数の遺構が破壊されたと思われる。

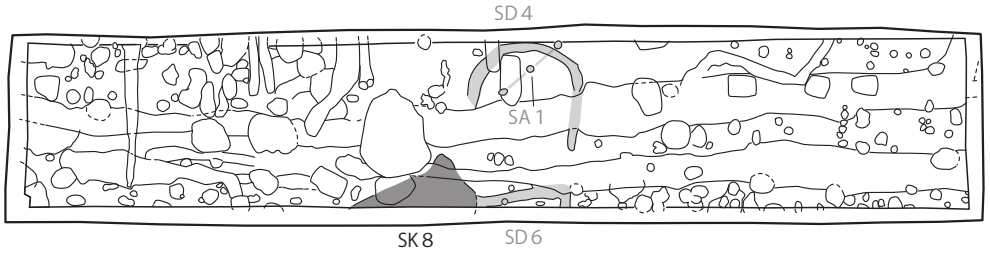
３　中世後期

今回の調査地において遺跡の中心となる時期である。時期不明の柱穴後を含め，多くの遺構が当該期にあたるものと考えられる。その中心的な遺構が15世紀を中心に造営され，16世紀前半の内には埋没したと考えられる区画溝ＳＤ１・２である。いずれも東北東－西南西延長50m以上，幅2.2ｍ，深さ0.5～0.6ｍ程度と本来ほぼ同一規模の溝であったと考えられ，ＳＤ２においては調査区東端で北方に屈曲することも確認できる。区画溝内からは輸入陶磁器も複数出土しており，中世の屋敷跡を区画する溝と考えて良いであろう。

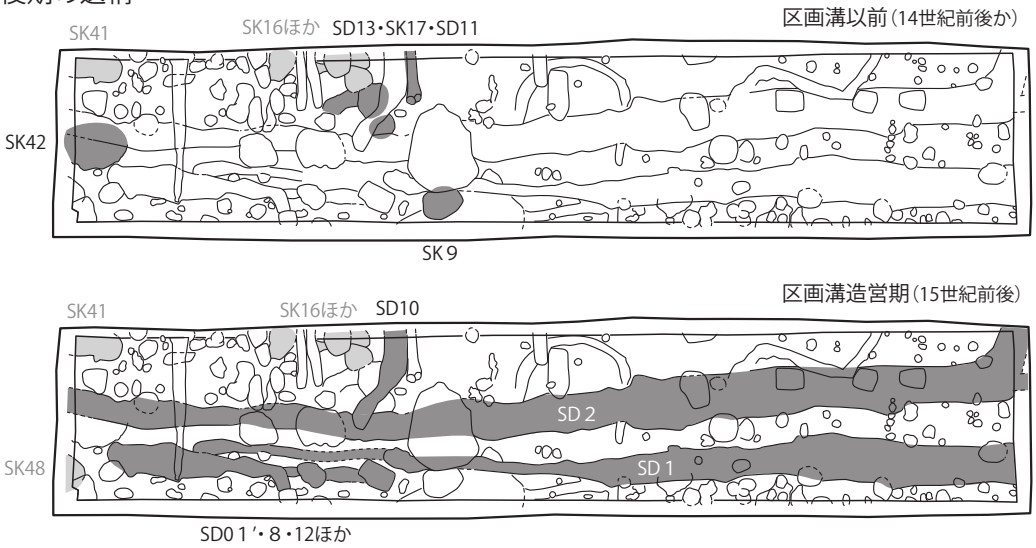
弥生時代中期後葉～後期初頭前後の遺構



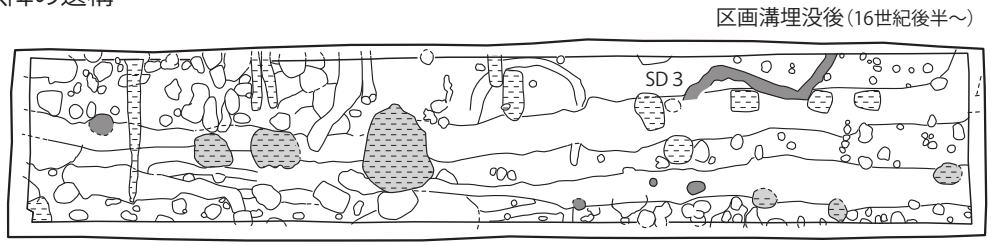
古墳時代後期～奈良時代前後の遺構

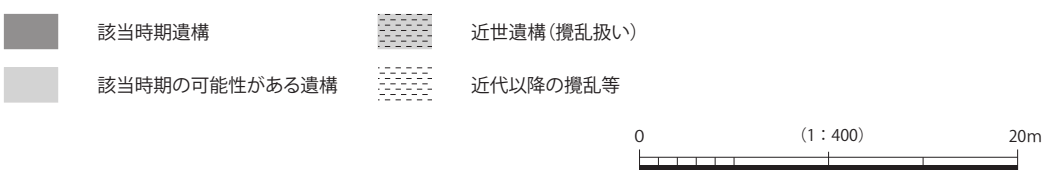


中世後期の遺構



中世末以降の遺構





第 18 図　第 14 次調査Ⅰ区遺構変遷図

なお，屋敷跡区画溝以前においても調査区西部を中心に溝と土坑が多数掘削されており，ＳＫ９では 14 世紀後半～ 15 世紀後半頃の青磁が，ＳＫ 42 では 13 世紀中葉～ 14 世紀初頭前後の青磁が出土している。遅くとも 14 世紀には輸入陶磁器を入手可能な集団が生活を始めたと考えられる。

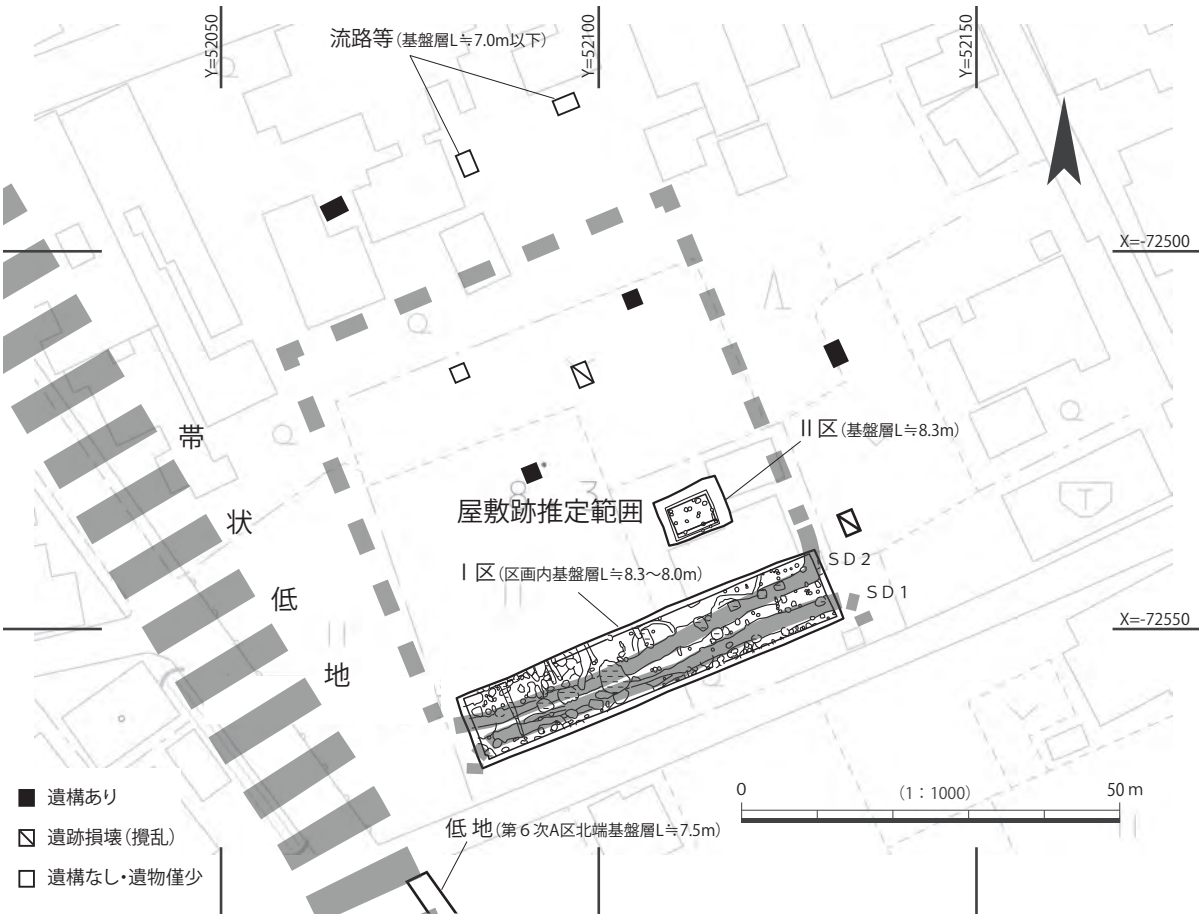
４　その後

屋敷跡区画溝遺構は 16 世紀前半の内には埋没したと思われるが，16 世紀後半期の明確な遺構・遺物は存在せず，詳細時期不明の溝ＳＤ３等も含めて全て近世以降の遺構である可能性が高い。

近世期における当該地の土地利用としては，区画溝跡地のゆるく湿った地盤に井戸・水溜穴等を多く掘削しているようである。

第２節　中世屋敷跡について

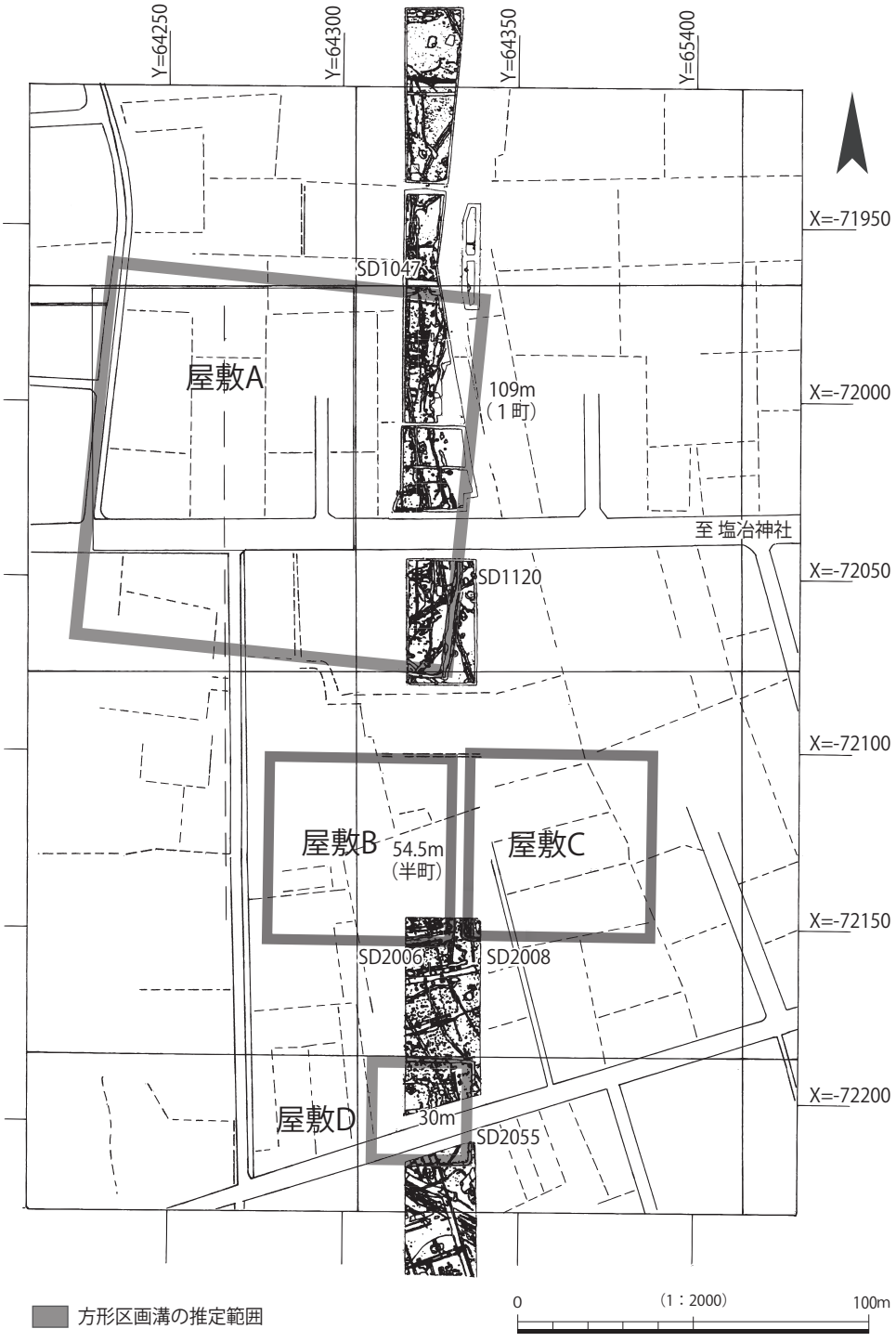
今回の調査で確認した中世屋敷跡に伴う区画溝ＳＤ１・２は，いずれも幅 2.2 m前後，深さ 0.5 m前後，Ｎ－ 68°－Ｗ方向の溝である。15 世紀を中心に機能し ,16 世紀前半の内に埋没したと考えられる。その西方には帯状低地が広がり，北方にも流路等とみられる互層状の堆積を有した低地が確認されている（第 19 図）ことから，１町（109m）四方規模の屋敷跡を想定することは難しい。調査区内で確認できる最大延長で 50 m以上であることから , 半町（54.5m）四方の区画を想定してみたい。



第 19 図　中世屋敷跡の推定範囲と隣接地調査状況

第 19 図には屈曲地点が明確な区画溝ＳＤ２を半町四方の区画と想定した場合の屋敷跡推定範囲を示した。現在の地割にも近い形状となっており，最も可能性が高い規格と考えて良いであろう。

ＳＤ１についてはＳＤ２と平行に検出され，ほぼ同一規模，同一時期の区画溝である。同一敷地内を囲む二重の溝であった可能性もあるが，当該期の隣接した別の屋敷地が南方に並んで存在したと考えるのが妥当であろう。近隣の類例としては，築山遺跡（出雲市上塩冶町）で発見された屋敷跡の例が挙げられる（出雲市教育委員会 2009ab）。築山遺跡とその隣接遺跡では，塩冶氏に関係すると見られ



第 20 図　築山遺跡の中世屋敷密集状況

9・10次F区
9・10次G区
9・10次HⅡ区
9・10次HⅠ区
11次1T
13次
旧山陰街道
9・10次I区
5・7次A区
5次B区
屋敷跡
14次
屋敷跡？
7・8次C区
9・10次J区
和鏡出土地
8次D区
6次
8次E区
6次
下古志遺跡
2次
古志本郷遺跡
12次K区
1次4T
1次5T
1次3T
1次6T
1次G区
1次F区
3次
1次1T
1次E区
2次1区
2次2区
古志氏
居館跡？
1次2T
2次3T
2次3区
田畑遺跡
1次2T
1次1T
4次
2次4区
1次3T
思案橋北遺跡
1972遺構・遺物発見地点
1次
古志遺跡
1973遺物採集地点
浄土寺山城跡
0
(1：5000)
200m

第 21 図　調査地周辺図

る区画溝を伴う 13 ～ 16 世紀の屋敷跡が数多く発見されている。その多くが 1 町四方または半町四方を意識した区画であった。最も密集しているエリアの屋敷跡配置を第 20 図に示した。今回の調査で推定した屋敷跡と同規模となる，半町四方の規模と想定されている屋敷跡が図中の屋敷 B にあたる。屋敷 B の東にも隣接して屋敷 C が存在しており，古志本郷遺跡の状況と類似している。

第 3 節　古志氏と古志遺跡群

中世期において，古志本郷遺跡の南方丘陵上には有力な国衆「古志氏」の居城であった浄土寺山城・栗栖城が，平野部には古志氏の居館が築かれ，調査地北方の旧山陰街道沿いにはその市場町が形成されていた。古志氏の居館は浄土寺山城跡北方の田畑遺跡付近にあったと考えられている（第 21 図・古志町誌編纂委員会 1990）。古志氏は 1280 年代頃に成立し，杵築大社や領主権力と密接な結びつきを持った国人領主で，15 世紀後半～ 16 世紀初頭にかけては神門川・日本海における水運権益の保有及びそれに依拠した広域的交流を行っていたことも指摘されている（長谷川 1999）。16 世紀半ばの毛利氏による出雲侵攻で古志郷を制圧されて以降は古志郷における継続的な所領回復は実現せず，16 世紀末の転封によって古志氏と出雲国との関係は途絶えることとなった。

古志本郷遺跡第 14 次発掘調査において発見した屋敷跡は 15 世紀前後のものと考えられ，古志氏の最盛期とも言える時期のものである。青磁・白磁といった輸入陶磁器も出土しており，古志氏に関係した集団の屋敷跡と考えて良いであろう。区画溝外からの中世遺物も 14 ～ 15 世紀前後に集中しており，古志氏の古志郷所領時期とほぼ一致する。

周辺の調査状況（第 21 図）を見ると，古志本郷遺跡における既往の調査において今回の調査地に比較的近い 5 ・ 7 ・ 8 次調査 A ・ C ～ E 区，9 ・ 10 次調査 H 区を中心に中世の居住域と考えられる掘立柱建物群が確認されており，これらの調査区周辺で 13 ～ 16 世紀の輸入陶磁器が多く出土している。また，今回の調査地西方約 200 m で令和 4 年度に実施した下古志遺跡 6 次調査においては，15 世紀後半頃の和鏡である擬漢式鏡の菊花散双鳥鏡や青磁片が出土している。古志本郷遺跡の屋敷跡とほぼ同時期の資料であることも興味深い。

これらの遺構や遺物の分布状況からも，古志遺跡群の北部エリア，旧山陰街道沿い周辺の広い範囲が古志氏の影響下にあった中世集落の中心域となると考えられ，この地域と古志氏居館推定地周辺域における調査の進展が古志氏の実態解明の鍵となると思われる。今後の調査に期待したい。

参考文献

古志遺跡群の参考文献については第 3 章に準ずる。

長谷川博史 1999「出雲古志氏の歴史とその性格」『出雲古志氏とその性格－古志の歴史Ⅱ－』古志史探会編　古志公民館

出雲市古志町誌編纂委員会 1990『古志町誌』出雲市古志町誌刊行委員会

出雲市教育委員会 2009a『築山遺跡Ⅲ』Ⅲ県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　出雲市の文化財報告 5

出雲市教育委員会 2009b『築山遺跡Ⅳ』Ⅳ県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　出雲市の文化財報告 6

第2表　出土土器観察表

番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)				調整等	色調	備　考
				口径	器高	底径	残存率・その他			
SD1										
1	i19Gr	弥生土器	甕				口縁部小片	外:凹線文 内:ナデ, 頸部以下ケズリ	にぶい橙色～にぶい黄橙色	
2	i19Gr	弥生土器	甕				口縁部小片	外:凹線文 内:ナデ	灰白色～褐灰色	
3	i19～20Gr 遺構検出中	弥生土器	甕等			4.8	底部のみ	外:ハケメ 内:ケズリ	にぶい橙色～灰黄褐色	
4	h2Gr	弥生土器	高杯等				接合部付近のみ	外:脚部沈線文 内:脚部ケズリ	灰白色	
5	h2Gr	須恵器	杯蓋				口縁部小片	外:ナデ 内:ナデ	灰～灰黄色	
6	h2Gr	須恵器	杯身				受部小片	外:ナデ 内:ナデ	灰～灰黄色	
7	h2Gr	土師器	杯等			6.0	底部のみ	外:ナデ, 底部回転糸切 内:ナデ	褐灰色	
8	h2Gr	備前焼	甕等				底部小片	外:ナデ 内:ナデ	外:灰赤色　内:灰色	
9	i20Gr	備前焼	甕等				底部小片	外:ナデ 内:ナデ	外:灰赤色　内:褐灰色	
10	i18Gr	青磁	椀	(12.0)			口縁端部約1/6残存	外:施釉, 蓮弁文 内:施釉	明緑灰～明オリーブ灰色	
11	i19Gr	青磁	椀				口縁部小片	外:施釉, 蓮弁文 内:施釉	明オリーブ灰色	
SD2										
13	i19Gr	弥生土器	甕				口縁部小片	外:凹線文 内:ナデ	にぶい黄橙色～淡黄橙色	
14	k14Gr	弥生土器	甕等			(8.0)	底部約1/4残存	外:ミガキ 内:風化	黄灰色～褐灰色	
15	j15Gr	土師器	高杯等				接合部付近のみ	外:風化 内:風化	灰白色	
16	g2Gr	須恵器	甕				肩部小片	外:タタキ 内:タタキ	灰色	
17	h20Gr	土師器	杯等			6.1	底部のみ	外:ナデ, 底部回転糸切 内:ナデ	灰黄色	底部穿孔
18	h19Gr	土師器	皿	(12.4)	2.6	(8.0)	約1/2残存	外:ナデ, 底部回転糸切 内:ナデ	にぶい黄橙色	
19	g2Gr	土師器	杯			5.6	底部のみ	外:ナデ, 底部回転糸切 内:ナデ	橙色	
20	k14Gr	土師器	杯			5.0	底部のみ	外:ナデ, 底部回転糸切 内:ナデ	にぶい黄橙色	
21	g2Gr	土師器	杯			6.0	底部のみ	外:ナデ, 底部回転糸切 内:ナデ	浅黄橙色～灰白色	SD2′か
22	i17Gr	土師器	杯			5.0	底部のみ	外:ナデ, 底部回転糸切 内:ナデ	浅黄橙色～灰白色	
23	i17Gr	土師器	杯等			5.5	底部のみ	外:ナデ, 底部回転糸切 内:ナデ	浅黄橙色	
24	j16Gr	備前焼	擂鉢				口縁部破片	外:ナデ 内:擂目	褐灰色	
25	h20Gr	備前焼	擂鉢				底部破片	外:ナデ 内:擂目	灰赤色～褐灰色	
26	j16Gr	備前焼	擂鉢				口縁部片口小片	外:ナデ 内:擂目	にぶい赤褐色	
27	h20Gr	備前焼	擂鉢				口縁部片口小片	外:ナデ 内:擂目	灰黄褐色～褐灰色	
28	g2Gr	備前焼	擂鉢				口縁部小片	外:ナデ 内:擂目	灰赤色	
29	19Gr以東 遺構検出中	備前焼	擂鉢				口縁部小片	外:ナデ 内:擂目	暗赤褐色	
30	j15Gr	青磁	椀				口縁部小片	外:施釉, 雷帯文・蓮弁文 内:施釉	オリーブ灰色	
31	g2Gr	白磁	椀				口縁部小片	外:施釉 内:施釉	灰白色	
SD10										
41	i16・j16Gr	土師器	杯				口縁部小片	外:ナデ 内:ナデ	灰白色	
42	i16Gr	土師器	杯			(5.8)	約1/3残存・口縁欠損	外:ナデ, 底部回転糸切 内:風化	灰白色～浅黄橙色	
43	i16Gr	土師器	杯			(7.0)	底部付近約1/3残存	外:ナデ, 底部回転糸切 内:ナデ	灰白色	
44	i16Gr	土師器	杯			(6.0)	約1/2残存・口縁欠損	外:ナデ, 底部回転糸切 内:ナデ	浅黄橙色	
45	i16Gr	土師器	杯等			(6.6)	底部のみ	外:風化 内:風化	浅黄橙色	
46	i16Gr	土師器	杯			(5.5)	底部付近約1/3残存	外:ナデ, 底部回転糸切 内:ナデ	浅黄橙色	
47	i16Gr	土師器	杯	(18.0)			口縁部約1/6残存	外:ナデ 内:ナデ	浅黄橙色	
48	i16Gr	備前焼	擂鉢				口縁部小片	外:ナデ 内:擂目	暗赤褐色～にぶい赤褐色	
SD12										
52	k15Gr	土師器	杯				口縁部小片	外:ナデ 内:ナデ	浅黄橙色～黄橙色	
SK9										
53	j17Gr	青磁	椀	(13.6)			約1/5残存・底部欠損	外:施釉, 蓮弁文 内:施釉	オリーブ黄色～灰オリーブ色	
SK7										
54	i19Gr	弥生土器	甕	(18.0)			口縁～体部約1/3残存 体部最大径(23.0)	外:口縁凹線文,体部ハケ・刺突文 内:ナデ, 頸部以下ケズリ	褐灰色	
SK8										
55	j18Gr	土製品	土製支脚				上部約1/2残存・脚部欠損	ナデ・オサエ	にぶい橙色	背面非貫通孔 推定2方向突起
柱穴群										
57	j15Gr	土師器	杯		2.9		口縁部～底部付近破片	外:ナデ 内:ナデ	黄灰色～淡黄色	
58	j14Gr	土師器	杯等			(6.4)	底部約1/4残存	外:ナデ, 底部回転糸切 内:強いナデ	にぶい橙色	
59	j15Gr	備前焼	擂鉢				口縁部小片	外:ナデ 内:擂目	にぶい赤褐色	

番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)				調整等	焼成・色調	備 考
				口径	器高	底径	残存率・その他			
遺構外										
62	i19Gr周辺③層 表土掘削中	弥生土器	甕	(28.2)			口縁部～肩部約1/4残存	外:口縁凹線文, 体部ハケメ 内:ナデ, 頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色～灰黄褐色	
63	j17Gr 近世攪乱土	弥生土器	甕	(21.4)			口縁部～頸部約1/5残存	外:口縁凹線文, 肩部ナデ 内:ナデ, 頸部以下ケズリ後ナデ	淡黄色～灰黄色	
64	h17Gr 近代？攪乱土	弥生土器	甕				口縁部小片	外:口縁凹線文 内:ナデ	灰白色	
65	Ⅰ区③層 表土掘削中	弥生土器	甕等			(6.0)	底部のみ	外:風化 内:風化	にぶい橙色～にぶい黄橙色	
66	j17Gr 近世攪乱土	弥生土器	甕等			(6.0)	底部約1/3残存	外:ナデ 内:風化	暗褐色	
67	事業地南端17～ 19Gr工事立会中	土師器	甕	(27.0)			口縁部～肩部約1/6残存	外:体部ハケメ 内:体部ケズリ	橙色	SD6～SK8付近出土
68	j17Gr 近世攪乱土	土師器	甕				口縁部小片	外:ナデ 内:風化	にぶい黄橙色	
69	事業地南端17～ 19Gr工事立会中	土師器	甕				口縁部小片	外:風化 内:風化	浅黄橙色～橙色	SD6～SK8付近出土
70	j17Gr 近世攪乱土	土師器	甕				口縁部小片	外:風化 内:口縁部ハケメ, 頸部以下ケズリ	灰白色	
71	i17Gr③④層	土師器	高杯				脚部破片・端部欠損	外:ミガキ 内:風化(ケズリか)	灰白色	3方向円形スカシ
72	Ⅱ区③④層	土師器	高杯等				脚端部小片	外:赤色塗彩 内:風化	にぶい黄橙色～灰白色	
73	h20Gr 近世以降攪乱土	土師器	皿	(8.2)	1.8	(6.4)	約1/3残存	外:ナデ, 底部回転糸切 内:ナデ	浅黄橙色～灰白色	
74	Ⅰ区排土中	土師器	杯等			7.2	底部約2/3残存	外:ナデ, 底部回転糸切 内:ナデ	浅黄橙色～淡気色	
75	j17Gr 近世攪乱土	土師器	杯等			(6.6)	底部約1/3残存	外:ナデ, 底部風化 内:ナデ	浅黄橙色～にぶい黄橙色	
76	j17～18Gr 側溝掘削中	瓦質土器	鉢等				底部付近破片	外:研磨 内:ナデ	黒色	SD6～SK8付近③層か 底部付近外面突帯1条
77	k13Gr3③④層	青磁	椀				口縁部破片	外:施釉 内:施釉	オリーブ灰色	
78	Ⅰ区③④層	青磁	椀等			(4.6)	底部約1/2残存	外:施釉, 畳付端部付近無釉 内:施釉	明緑灰色	

第3表　出土金属器観察表

番号	出土地点	種別	法量(cm)				残存状況	備 考
			長	幅	厚	その他		
SD1								
12	i20Gr	棒状鉄製品	残4.5	0.8～1.0	0.7		一方の端部欠損	鉄釘か
SD2								
32	h19Gr	鉄製刀子	残7.9	1.6	0.4		刃部のみ残存	
33	j16Gr	鉄製刀子	残5.9	1.7	刃部0.4 茎部0.6	刃部残長3.5 茎部残長2.4	刃部と茎部の一部欠損	
34	h19Gr	板状鉄製品	残7.5	6.3	0.6		欠損部有	用途不明
35	h19Gr	不明鉄製品	残5.2	3.3	1.7		欠損部有	用途不明
36	h20Gr	大形鉄釘か	残19.2	2.8～0.7	1.6～0.5		端部を除きほぼ完形	欠損部端部尖頭
37	g2Gr	鉄釘か	残7.3	0.8	0.8		欠損部有	欠損部端部尖頭傾向
38	g2Gr	鉄釘か	残6.3	0.5	0.5		欠損部有	残存先端部尖頭
39	g2Gr	鉄釘か	残4.2	0.7	0.6		欠損部有	欠損部端部尖頭傾向
40	j16Gr	鉄釘か	残5.2	0.8	0.6		両端欠損	欠損部端部一方尖頭傾向
SD10								
49	i16Gr	棒状鉄製品	残8.1	1.2	1.2		両端欠損	両端部尖頭傾向
50	i16Gr	鉄釘か	残5.4	1.0	0.6		欠損部有	残存先端部尖頭傾向
51	i16Gr	板状鉄製品	残8.7	残3.8	0.2～0.35	※展開法量を示す	欠損部有	両刃状の横断面 2箇所以上の折り曲げ有
SK42								
60	k13Gr	鉄釘	残3.3	0.5	0.6	※展開長を示す	両端欠損	
柱穴群								
60	i17Gr	板状鉄製品	残5.7	2.9	0.6		欠損部有	用途不明
61	i17Gr	板状鉄製品	残'3.0	残2.7	0.6		欠損部有	用途不明
遺構外								
79	Ⅰ区③④層	鉄釘	残 7.2	1.2	0.9	※展開長を示す	先端欠損	

写真図版

完掘状況空撮合成写真（上が東北東）

図版２

Ⅰ区　遺構検出状況（東北東から）

ＳＤ１・２（北東から）

ＳＤ１（東北東から）

ＳＤ１調査区東壁土層堆積状況（西南西から）

図版４

ＳＤ２（東北東から）

ＳＤ２Ｆ－Ｆ' 断面土層堆積状況（東北東から）

ＳＤ２屈曲部（南東から）

ＳＤ２屈曲部・ＳＤ２′（北から）

図版６

ＳＤ４・ＳＡ１（北東から）

ＳＤ６（西から）

ＳＤ 10（南から）

Ⅰ区 i15・16 グリッド周辺遺構群（東から）

図版８

ＳＫ 42（北から）

ＳＫ 48（東北東から）

ＳＫ７（東北東から）

ＳＫ８(北から)

図版 10

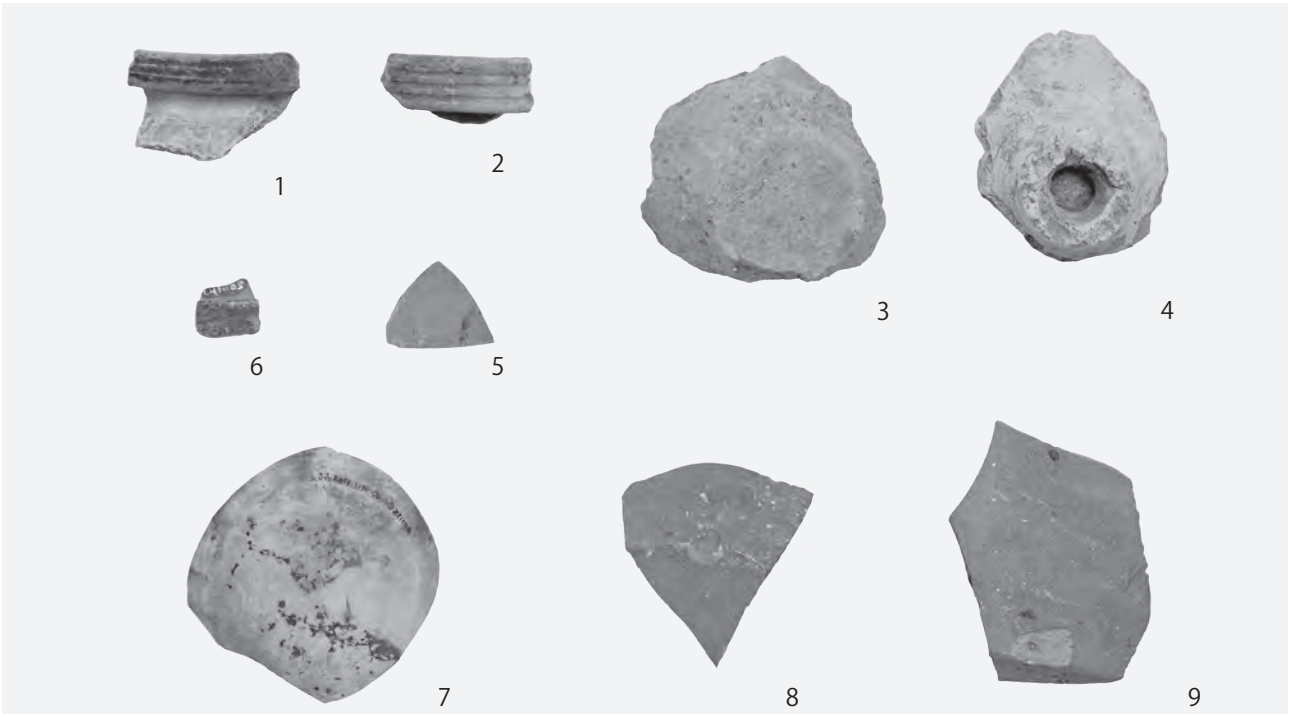
ＳＫ９（北から）

ＳＫ９土層堆積状況（南南東から）

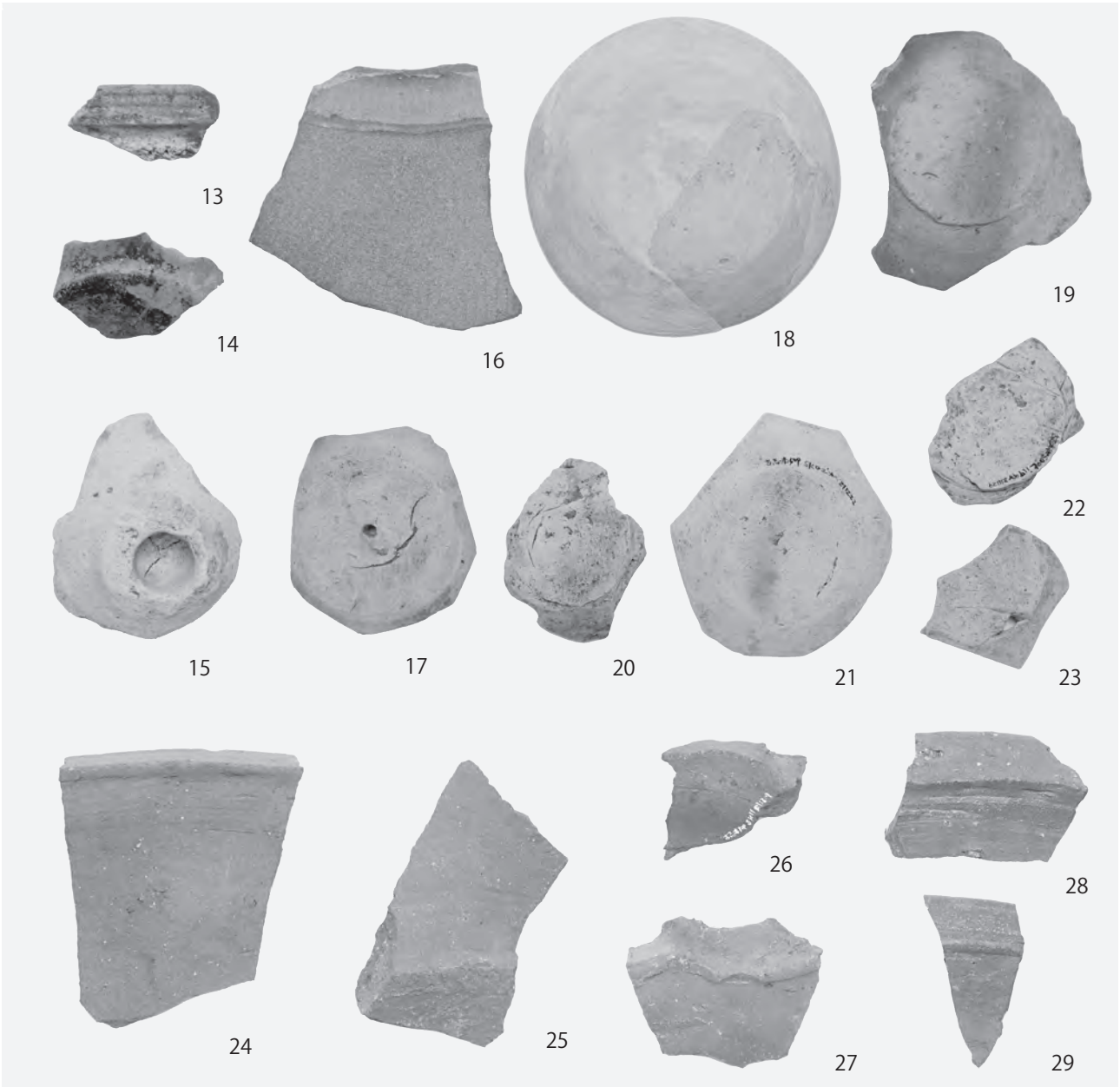
II 区遺構検出状況（東北東から）

II 区完掘状況（東北東から）

図版 12



ＳＤ１出土土器



ＳＤ２出土土器

54

62

ＳＫ７出土土器・ＳＫ７付近遺構外出土土器

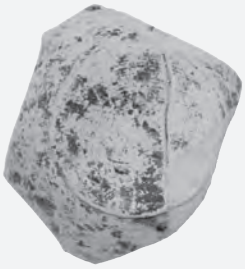
41

42

43

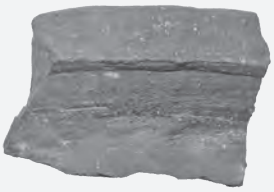
44

45



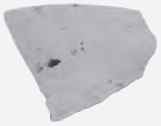
46

47

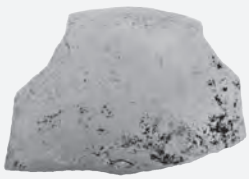


48

55



52



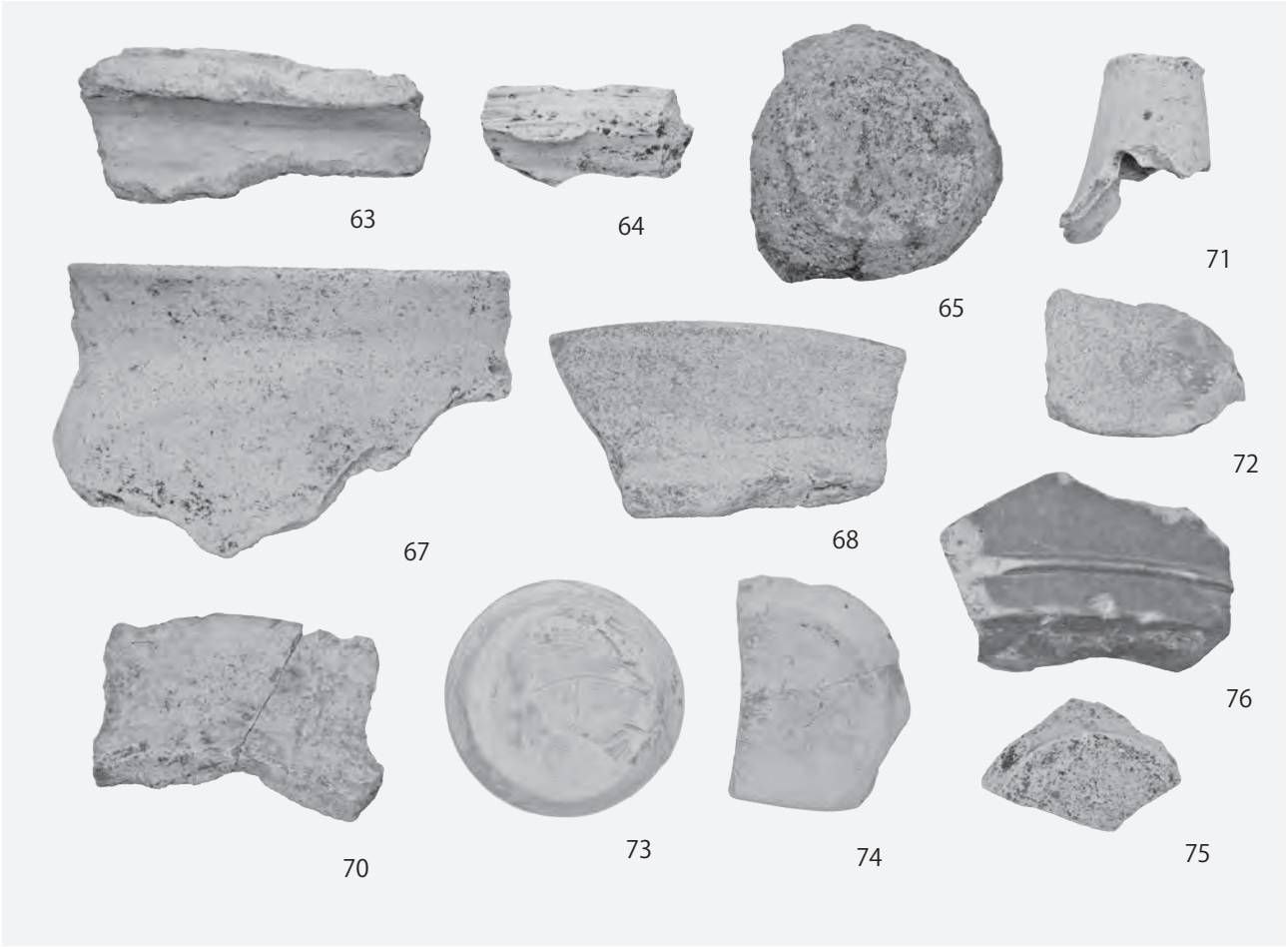
57

58

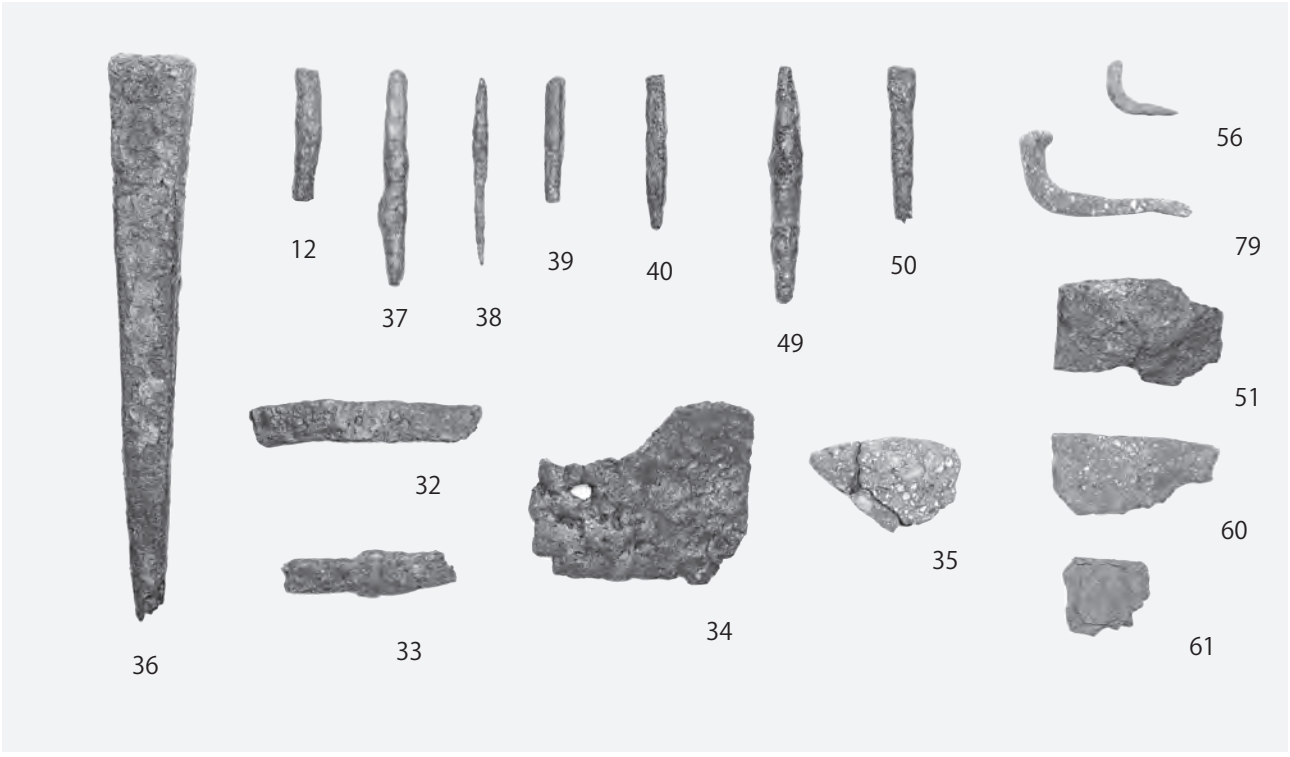
59

その他遺構内出土土器等

図版 14



その他遺構外出土土器



出土金属製品

報告書抄録

ふりがな	こしほんごうせき　だい 14 じはっくつちょうさ
書　名	古志本郷遺跡　（第 14 次発掘調査）
副書名	古志町地内集合住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	出雲市の文化財報告　53
編著者名	須賀照隆（編）
編集機関	出雲市　市民文化部文化財課
所在地	〒 693-0011　島根県出雲市大津町 2760 番地
発行年月日	2023 年 3 月

ふりがな		コード		北　緯	東　径	発掘期間	発掘面積
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
古志本郷遺跡（こしほんごういせき）	島根県出雲市（しまねけんいずもし）古志町（こしちょう）983 ほか	32203	W 1（島根県遺跡地図）	35° 20′ 40″	132° 44′ 23″	20211008 ～ 20211224	約 600㎡ 発掘要因 集合住宅

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古志本郷遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代後期 ～奈良時代 中世	土坑 柱穴 溝	弥生土器 須恵器 土師器 陶磁器 鉄製品	中世屋敷跡 青磁・白磁

要約	調査区全域で弥生時代中期後葉から中世までの遺構・遺物を確認した。中世前期以前の遺構は僅少であり，中世後期が今回の調査地点における遺跡の中心時期となる。 中世後期の中心遺構として，15 世紀前後の屋敷跡に伴うと考えられる区画溝２条を発見した。遺構の内外から輸入陶磁器も出土している。それぞれ半町四方以上の区画が想定され，出雲古志氏に関係した集団の屋敷群である可能性が考えられる。

出雲市の文化財報告　53

古志町地内集合住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

古志本郷遺跡（第 14 次発掘調査）

2023 年 3 月　印刷

編　集　　出雲市 市民文化部 文化財課
〒 693-0011 島根県出雲市大津町 2760 番地
TEL（0853）21-6618

発　行　　出雲市教育委員会
〒 693-8530 島根県出雲市今市町 70 番地
TEL（0853）21-6874

印刷・製本　　株式会社 報　光　社